平成27年度 全国地域包括ケア推進大会

～国民の健康をまもる保健師 Presents ～

コラボが生みだす健康づくり
未来へのチカラ 2015
報告書

開催日時　平成 27 年 10 月 24 日(土) 10：00 ～ 16：00

場　　所　日本看護協会ビル

公益社団法人 日本看護協会

目 次

ご挨拶　日本看護協会　常任理事　中板育美 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅰ．開催概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ．シンポジウム　「創る、生みだす、未来の健康資産」

日本一の”健幸都市”を目指して ～伊達市の取り組み～ ・・・・・・・・・・・・・・・・17
伊達市長　仁志田昇司氏
伊達市健康福祉部 健幸都市づくり課 健幸都市推進係
主幹兼健幸都市推進係長（保健師）　長沢弘美氏

自治体と企業の協働による健康づくり ～松本市での取り組み～ ・・・・・・・・・・・・23
松本市健康福祉部健康づくり課課長補佐（保健師）　加藤琢江氏
株式会社ローソン顧問　鈴木清晃氏

シンポジウムまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

Ⅲ．セミナー
セミナー1　体力づくりや仲間づくりがぐんぐん深まる！ ・・・・・・・・・・・・・・・33
セミナー2　地域ケア会議が肝心、要！実践事例検討会をやってみよう ・・・・・・・・34
セミナー3　最前線！みんなが主役、認知症への取り組み ・・・・・・・・・・・・・・・35
セミナー4　ぐらんぱが直接伝授！“ぐらんぱ”の醍醐味 ・・・・・・・・・・・・・・・36

Ⅳ．対　談 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
一橋大学大学院社会学研究科教授　猪飼周平氏
日本看護協会常任理事　中板育美

Ⅴ．資料
参加者数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
セルフ健康チェックコーナー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
アンケート結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
当日配付資料等一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
後援・協力団体一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59

ご挨拶

日本看護協会　常任理事　中板育美

日本は少子超高齢社会を迎え、2025年には、人口の約18％が75歳以上の後期高齢者になると推計されています。
本会は、今年、その2025年に向け「看護の将来ビジョン～いのち・暮らし・尊厳を守り支える看護」を掲げ、これからの看護の方向性を明確にしました。
ビジョンでは、「健やかに生まれ育ち、疾病の悪化や重症化を予防し、住み慣れた地域で自分らしく暮らし続ける」といった、誰しもが願う「尊厳をもち、健康に幸福であり続けたい」という普遍的なニーズを受け止め、国民の期待に応える看護の姿を打ち出しました。

同時に、平成２７年度の本会重点事業のひとつに地域包括ケアシステムの構築と推進を掲げました。本イベント「コラボが生みだす健康づくり　未来への力2015」は、その一環として、本会が開催したものです。

国も「健康寿命の延伸を重視し、効果的な予防サービスや健康管理の充実により、健やかに生活し、老いることができる社会」を目指すには、地域づくりやソーシャルキャピタルが重要であると、繰り返し謳うようになりました。
こうした「予防」や「互助の地域づくり」は、まさに、これまで保健師が活躍してきた分野であり、果たしてきた役割です。
社会全体が「地域」をキーワードに、保健師の重要性を認識し、誰よりも地域をみてきた保健師の役割が重視され、期待が高まっています。

一方で、社会や疾病構造の変化も相俟って、健康づくりは行政だけで、完結する時代ではなくなりました。多くの企業が健康や予防をキーワードに、アイデアや対策を打ち出し、健康な社会の創成に積極的になっています。
行政の保健師は、これまでのノウハウも踏まえながら、企業とコラボし、よりダイナミックに健康づくりを仕掛ける絶好のポジションにいます。企業、行政、住民が共に、智慧と力を出し合い、協力できるよう、保健師が要となって活動することが必要です。

本イベントは、全国で展開されている先駆的な様々な取り組みを、みなさまと共に、共有したいと開催いたしました。保健師が地域をしっかり見据えて、企業や関係機関とコラボし、住民と共に、活動することを忘れない限り、必ず実現できます。希望のある明日を創るために、本大会が大きな一歩となることを願い、当日の模様を報告書にまとめました。ぜひご活用ください。
最後になりましたが、ご協力いただきましたすべてのみなさまに感謝申し上げます。

Ⅰ. 開催概要

開催概要

- タイトル：国民の健康をまもる　保健師　Presents
  コラボが生みだす健康づくり
  未来へのチカラ　2015
- 主　　催：日本看護協会
- 事務局：日本看護協会 健康政策部保健師課
- 開催日時：2015年10月24日（土）　10:00～16:00
- 会　　場：日本看護協会ビル
- 対　　象：重症化予防、健康づくり等の実践者や関心のある方
- 参加方法：特設ホームページ、FAXにて申し込み
- 募集期間：2015年9月11日～2015年10月21日
- 告知方法：①リーフレットの配布
  都道府県(健康づくり主管課)、全国の市町村(健康づくり担当課)、保健所、国保連合会など
  ②告知記事掲載誌
  「保健師ジャーナル」、「週刊保健衛生ニュース」、「地域保健」、「週刊社会保障」、「介護保険情報」、「保健の科学」、「公衆衛生情報」、「小児科」、日本看護協会機関誌「看護」
  ③日本看護協会広報誌、ホームページ掲載
  ④㈱日本能率協会総合研究所 メルマガ配信　　など
- 参加費：無料
- ﾘｰﾌﾚｯﾄ配付数：7,776件（2,379箇所）
- 申込数：157名（事前申込148名、当日申込9名）
- 来場者数：・シンポジウム、セミナー　132名
  ・セルフ健康チェックコーナー　337名(延べ人数)

プログラム（案内）

公益社団法人　日本看護協会

コラボが生みだす健康づくり

未来へのチカラ 2015

国民の健康をまもる 保健師 Presents

◇**日 時**：平成27年**10**月**24**日(**土**)10:00～16:00
◇**会 場**：東京都渋谷区神宮前　日本看護協会ビル
◇**参加対象者**：保健師、自治体関係者、重症化予防に関心のある方等
※先着順（定員になり次第締め切らせていただきます。）
◇**参加費**：無料

保健師の重要な役割として、「国民自身が疾病の重症化予防や健康の維持・増進に向け、セルフケア能力が向上するような直接的な支援」に加えて、「地域の実情に応じた健康づくり活動の仕組みづくり」があります。
本大会は、重症化予防対策や住民のQOLの向上に取り組み、地域の最前線で公衆衛生活動を行う保健師等の実践を通して得た学びを共有し、全国に発信するための大会です。ふるってご参加ください!

プログラム

10:00～12:00　【JNAホール】
挨拶　日本看護協会長　坂本すが
シンポジウム「創る、生みだす、未来の健康資産」
①日本一の"健幸都市"を目指して ～伊達市の取り組み～
伊達市 市長　仁志田昇司氏
伊達市 健康福祉部健幸都市づくり課健幸都市推進係 主幹兼健幸都市推進係長(保健師) 長沢弘美氏
②自治体と企業の協働による健康づくり ～松本市での取り組み～
株式会社ローソン 顧問 鈴木清晃氏 ／ 松本市 健康福祉部健康づくり課 課長補佐(保健師)加藤琢江氏
〈コーディネーター〉一橋大学大学院社会学研究科 教授 猪飼周平氏 ／ 日本看護協会 常任理事 中板育美

13:10～15:30
■セミナー1 (JNAホール)
体力づくりや仲間づくりがぐんぐん深まる！
・「いきいき百歳体操」　高知市 健康福祉部高齢者支援課 技査(保健師)　中越美渚氏
・「いんざい健康ちょきん運動」
印西市 健康福祉部高齢者福祉課 主任理学療法士 小塚典子氏 ／ いんざい健康ちょきん運動　原山譌々(あいあい)会の皆様
■セミナー2 (JNAプラザ)
地域ケア会議が肝心、要！実践事例検討会をやってみよう　日本看護協会 保健師職能委員会
■セミナー3(601会議室前)
最前線！みんなが主役、認知症への取り組み
・地域で求められている認知症ケア ～家族の立場から～
公益社団法人 認知症の人と家族の会埼玉県支部代表 花俣ふみ代氏
・実践例「歩いて行ける！ご近所のオレンジカフェ」　川越市 福祉部高齢者いきがい課 主幹(保健師) 佐藤尚美氏
■セミナー4(701会議室前)
ぐらんぱが直接伝授！"ぐらんぱ"の醍醐味
・シニア男性の潜在力を生かした異世代交流の地域活動　朝霞市健康づくり部健康づくり課保健係長(保健師) 近藤悦子氏
・朝霞市「ぐらんぱ」の活動　朝霞市ぐらんぱ育児支援者養成講座 修了生の皆様
※各セミナーは同じ内容を約1時間ずつ2回行います。

15:30～16:00　**意見交換会**

■日本看護協会ビル前（玄関前）　※交通事情等やむを得ない事情により、プログラムが一部、変更となる場合があります。

11:00～14:00　**「保健師があなたの健康を応援します」測定できます! セルフ健康チェック**

○後援　厚生労働省、全国市長会、埼玉県看護協会、千葉県看護協会、東京都看護協会、長野県看護協会、高知県看護協会、健康日本21推進全国連絡協議会、全国保健師長会、全国保健師教育機関協議会、日本産業保健師会、日本公衆衛生看護学会、日本保健師活動研究会、日本介護福祉・健康づくり学会、健康・体力づくり事業財団

お申込み　本会ホームページ「新着情報」をご覧ください。http://www.nurse.or.jp/
※本会会員以外の方も申込みいただけます。

お問合せ　【事務局】 日本能率協会総合研究所　TEL：0120-676-715　Eメール：iryou-fukushi@jmar.co.jp
【主　催】 日本看護協会　健康政策部 保健師課　Eメール：hokenshi@nurse.or.jp

プログラム（詳細）

時間	場所	プログラム
10:00 ～12:00	JNA ホール (B2F)	ご挨拶　（日本看護協会長　坂本すが） ■シンポジウム「創る、生みだす、未来の健康資産」 1) 日本一の“健幸都市”を目指して ～伊達市の取り組み～ 伊達市 市長　仁志田昇司氏 伊達市 健康福祉部健幸都市づくり課健幸都市推進係 主幹兼健幸都市推進係長(保健師) 長沢弘美氏 2) 自治体と企業の協働による健康づくり　～松本市での取り組み～ 松本市 健康福祉部健康づくり課 課長補佐(保健師)加藤琢江氏 株式会社ローソン 顧問 鈴木清晃氏 〈コーディネーター〉一橋大学大学院社会学研究科 教授 猪飼周平氏 日本看護協会 常任理事 中板育美
13:10 ～14:10 および 14:20 ～15:20	JNA ホール (B2F)	■セミナー1 体力づくりや仲間づくりがぐんぐん深まる！ 1) 「いきいき百歳体操」 高知市 健康福祉部高齢者支援課 技査(保健師)　中越美渚氏 2) 「いんざい健康ちょきん運動」 印西市 健康福祉部高齢者福祉課 主任理学療法士 小塚典子氏 いんざい健康ちょきん運動　原山藹々(あいあい)会の皆様
13:10 ～14:10 および 14:20 ～15:20	JNA プラザ (3F)	■セミナー2 地域ケア会議が肝心、要！実践事例検討会をやってみよう 日本看護協会 保健師職能委員会
13:10 ～14:10 および 14:20 ～15:20	601 会議室前 (6F)	■セミナー3 最前線！みんなが主役、認知症への取り組み 1) 地域で求められる認知症ケア ～家族の立場から～ 公益社団法人 認知症の人と家族の会埼玉県支部代表 花俣ふみ代氏 2) 実践例「歩いて行ける！ご近所のオレンジカフェ」 川越市 福祉部高齢者いきがい課 主幹(保健師) 佐藤尚美氏
13:10 ～14:10 および 14:20 ～15:20	701 会議室前 (7F)	■セミナー4 ぐらんぱが直接伝授！“ぐらんぱ”の醍醐味 1) シニア男性の潜在力を生かした異世代交流の地域活動 朝霞市健康づくり部健康づくり課保健係長(保健師) 近藤悦子氏 2) 朝霞市「ぐらんぱ」の活動 朝霞市ぐらんぱ育児支援者養成講座 修了生の皆様
15:30 ～16:00	JNA ホール (B2F)	■対　談 一橋大学大学院社会学研究科 教授 猪飼周平氏 日本看護協会 常任理事 中板育美

時間	場所	プログラム
11:00 ～14:00	1 F エントランス	健康チェック（一般対象）
10:00 ～16:00	B2 F JNAホール前	TANITA デモンストレーション脚部筋力バランス測定（参加者対象）

開催当日: セルフ健康チェック

会場となった日本看護協会ビル
(渋谷区神宮前)

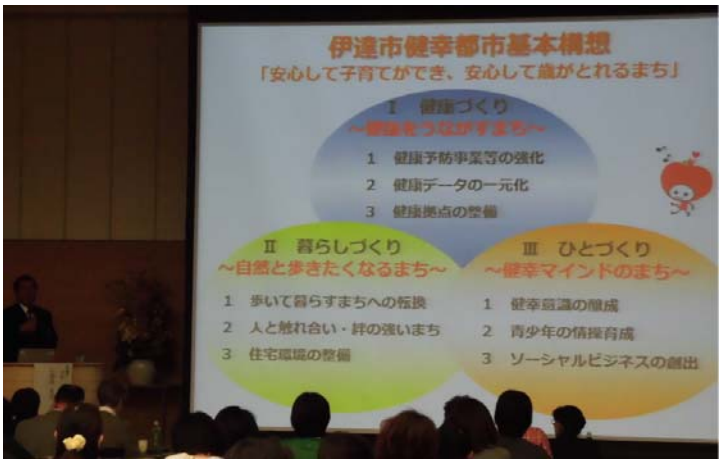
建物玄関前に掲示された開催告知看板(上)

地階ホールには、株式会社タニタ提供の脚部筋力バランス測定コーナーも配置。参加者らは、説明を聞きながら測定を体験した。

1階エントランスでは、保健師や本会看護職員らによるセルフ健康チェックも開催。会場前を通る一般市民も立ち寄って体験した。

開会のあいさつ/シンポジウム

開会に先立ち、挨拶をする日本看護協会坂本すが会長。
　地域包括ケア推進の時代の流れの中で、保健師の果たすべき役割がますます重要になっているとし、その活躍への期待を述べた。

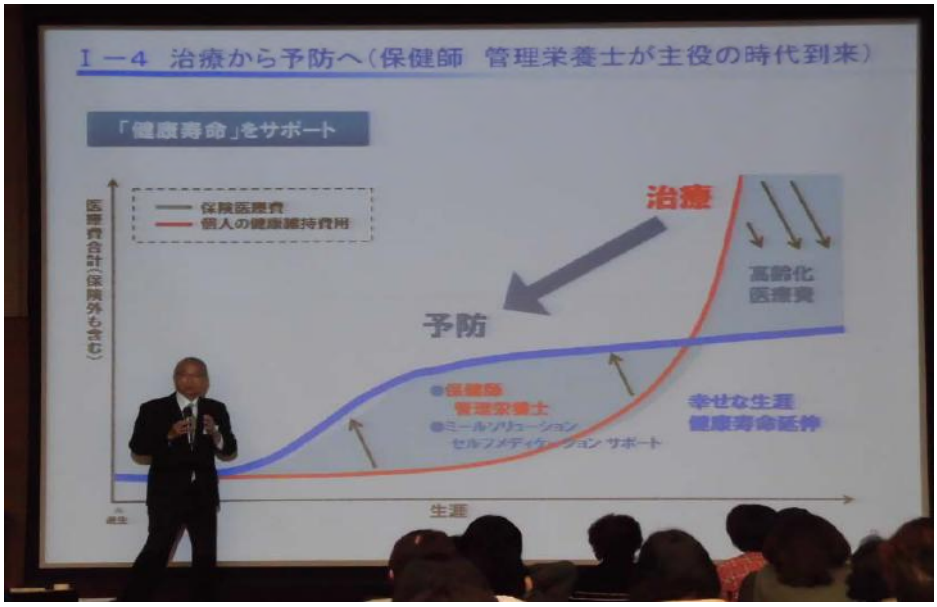


　シンポジウムで発表する伊達市仁志田市長(左)と長沢保健師(左下)。震災後、日本一の健康都市へ向けた取組みについて語った。

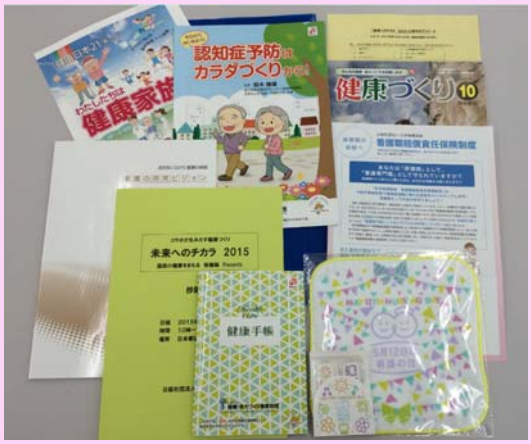
　シンポジウムコーディネーターの猪飼教授と本会中板理事

シンポジウム/配付資料

健康寿命延伸都市を目指す松本市の加藤保健師。
企業と協働した健康づくりの実際や、取り組みを通しての学び等について発表。



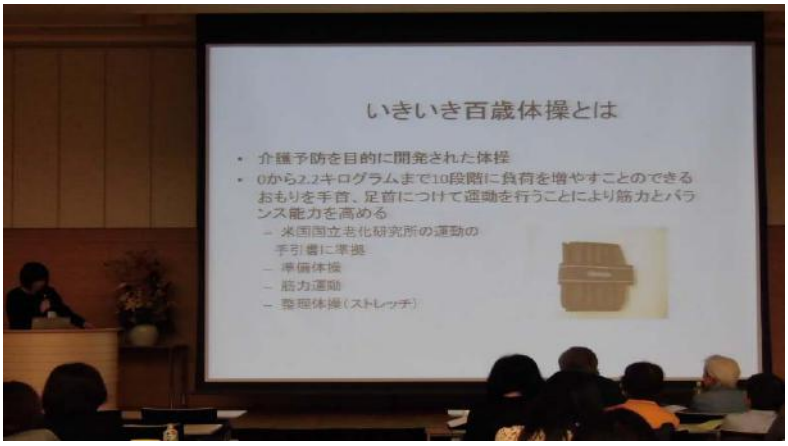
松本市とのコラボや、企業として労働者の健康に投資をする”健康経営”の必要性と取組みについて語るローソン鈴木顧問。



当日配付資料(パンフレットの一部は、健康・体力づくり事業財団提供)

アンケート回答者用プレゼント
(保健師活動指針活用ガイドと特製ボールペン)

セミナー



午後からは、4つの会場に分かれて、テーマごとのセミナーを開催。セミナー１会場では「体力づくりや仲間づくりがぐんぐん深まる！」と題し、高知市の「いきいき百歳体操」の成果や、印西市の「いんざい健康ちょきん運動」の取り組みが発表された。

原山藹々会のみなさんと「いんざい健康ちょきん運動」を体験するセミナー参加者。ゆっくりとした動きだが、実は身体の衰えがちな筋肉を使う体操であることを体験。

セミナー2「地域ケア会議が肝心、要!実践事例検討会をやってみよう」では、地域ケア会議のデモンストレーションを日本看護協会保健師職能委員が披露。

セミナー

セミナー3「最前線!みんなが主役、認知症への取り組み」では、今後、重要性を増す認知症への取り組みについて介護を経験した家族であり、家族会の埼玉県支部代表でもある花俣氏の活動報告や提言、川越市のオレンジカフェ(認知症カフェ)の取組み報告に耳を傾けた。

自由配布資料コーナー

セミナー/対談

セミナー4「ぐらんぱが直接伝授！“ぐらんぱ”の醍醐味」では、シニア男性が、潜在力を発揮し、地域における子育て支援で活躍している様子を紹介。参加者らも、ぐらんぱの指導を受けながら、皿回しに挑戦する体験タイムも設けられた。

すべてのプログラム終了後、最後にまとめとして、猪飼氏と中板理事による対談を実施。

プログラムを通しての学びや、「看護の将来ビジョン」、地域包括ケア概念への評価、保健師への期待等について語られた。

Ⅱ．シンポジウム

「創る、生みだす、未来の健康資産」

地域包括ケア推進の前提として「国民自身が疾病の重症化予防や健康の維持・増進に向け、セルフケア能力を向上できること」が必要であり、その支援を行うことは、自治体とその自治体で働く保健師の重要な役割の一つ。

また、その支援においては、行政主導の取り組みにとどまらず、地元の企業・関係機関、地域住民と共に、地域の実情に応じて活動できる仕組みづくりをすることが、以前に増して求められてきている。

本シンポジウムでは、こうしたことを背景に、実際に自治体ぐるみで取り組んでいる福島県伊達市と長野県松本市での取り組みが紹介された。

シンポジウム「創る、生みだす、未来の健康資産」

日本一の“健幸都市”を目指して　～伊達市の取り組み～

伊達市長　仁志田昇司氏

市長就任時から、一貫して保健福祉施策に新たな視点を取り込みながら、様々な政策を打ち出してきた仁志田市長。
震災や福島第一原発の被害を受けながらも、自治体のトップとして「非常時だからこそ、本当に必要なことをする」という理念のもと、健幸都市を目指して取り組んでいる。
先見性とブレない視座のトップの存在が、やがて「このまちに住み続けたい」という市民の思いと理解を引き出し、市民協働の健康づくり、地域づくり、そして幸福づくりにつながってきている。その根底にあった市長の考え方と、取り組みのプロセスを紹介した。

※以下、当日講演内容の抜粋

「健幸都市」。「健幸」の「幸」は「幸福」の「幸」。Smart Wellness Cityということで、『健幸都市』を目指し、どのような取り組みを続けて、今に至っているかということをお話し申し上げたいと思います。

【これまでの取り組み】

平成13年、町長になって改めて実態を見ると、少子高齢化社会が到来、介護問題が発生しておりました。

施設におけるユニットケア等について学んだり、高齢者への筋力トレーニングや、認知症予防の情報等も学んでは、市の事業に取り入れました。

平成19年度に運動教室をスタートし、エビデンスに基づく、ICTを活用した教室も実施しました。開始前は、実年齢よりも体力年齢の衰えている人がほとんどでした。15ヶ月運動教室に通うと、実年齢65歳に対し、体力年齢は58歳になりました。まさにこれはエビデンスです。ところが、なかなか教室参加者が増えない。市民の約7割の人は健康無関心と聞きますが、その7割をどうするかが問題と考えました。

【医療・介護費の一部を予防に“健康投資”する】

平成21年度に「ＳＷＣ首長研究会」を全国9市の首長等と設立しました。現在は63都市で、なかなか面白い取り組みです。中でもなるほどと思ったのは「健康投資」という考え方です。「経営というのは、何もしないで利益を得ることはできない。投資をしなくちゃいけない。我々は、医療や介護という結果に、莫大なお金を使っている。そのうちの何分の1でもいいから、予防に回そうじゃないか」という考え方です。

健康というのは当然、個人のものです。しかし、その成果は社会貢献なのです。つまり健康に努めるということは、それ自体、社会貢献なのです。

個人の取り組みを市全体の取り組みにしていく、あるいは社会の取り組みにしていく、もっと言えば、町自体が、そこに住んでいるだけで健康になる。そういうまちづくりを目指そうということを考えました。

【非常時であっても、本来“必要なことをやる！”－伊達市健幸都市宣言】

平成23年に、3･11がおきました。

強烈な地震の後、電気も来ない、水もでない状況でした。市民生活の復旧に向け、様々な対策を講じている中、テレビで福島第一原発が異常な状況になっていることを知りました。その後、3月23日になって、60キロも離れた伊達市に、放射能が来ていたと知りました。

とはいえ、当時は放射能を測る機械もないし、どういう単位なのかも知らない。情報もなく、状況も把握できないというのが実態でした。

その頃、本を読んでいたら“Business as usual”という言葉がありました。第二次世界大戦中にドイツからロンドンが爆撃をされて大変な時に、チャーチルが言った言葉だそうです。「非常時にあっても平常心でやろうじゃないか、常のことをやりましょう」という意味です。

我々の本来の業務としては、やはり一番の課題は少子高齢化社会、特に高齢化社会をどうするかということです。だから「もうやろうじゃないか!」と決めて、11月に「伊達市健幸都市宣言」をしました。

健康を個人に任せるだけではなくて、行政としても、もっと組織的に、体制的に取り組む。個人の取り組みを行政の取り組み、社会の取り組みにしようと2地区をモデル地区にしました。

【健幸都市の基本は、健康と暮らしと、ひとづくり】

健幸都市の基本的な考え方は、「Ⅰ健康づくり」「Ⅱ暮らしづくり」「Ⅲひとづくり」です。「健康づくり」は、健康予防事業を強化していくということです。

これは集団健診や特定健診をもっと徹底すること。個人の健康への取り組み、これを強化していくということです。

その上で、健康データの一元化は重視したい。市長には市民の健康を守る立場にあります。しかし、今は、市民の健康状態を全部知ることはできないのです。3分の1しか知らない。企業等が雇っている働く人の健康状態はわからないのです。市民の健康を守るという観点で言うと、責任を果たせない。都道府県単位の国民健康保険になっても、今後、ビッグデータを処理するクラウドを使ってやれば、できないこともないと考えています。

また、「健康拠点の整備」というのは「歩きなさい」と言うだけではなくて、運動教室の開催や、歩きやすいウォーキングロードをつくるなどということも、やっていかないといけないのです。

【暮らしづくり、絆の強いまちへ】

「暮らしづくり」は、Smart Wellness Cityの真髄です。

「歩いて暮らすまちへの転換」を考えています。歩くことは全ての健康の基本ですが、マイカー社会となりほとんど歩かない、今は農作業も、機械に乗ったままで全然歩かない。
一方で、高齢化社会で、車がないと生活にも支障がでてしまう。

これからのまちづくりというのは、コンパクトビレッジといったことも、考えてやっていかなければならないと思います。

【絆の強いまちづくり】

これから高齢化社会は、施設に頼ってばかりだけではダメじゃないかと考えています。地域包括支援センターを中心に、住み慣れたところでやろうじゃないかという取り組みが、今、各市町村でなされております。

私は、市民に「あまり行政に期待しないでもらいたい」と話しています。

災害が発生した時でも、行政が全ての人に対して迅速に対応できるかというと、できない。認知症についてもそうです。今後は共助を強化していく必要があります。一言で言えば「地域が家族」になるべきなのだろうということを、私は市民に対して話をしております。

この助け合いの精神をもっと円滑にしていくためには、私は将来的に言うと地域通貨というのを導入すべきだと思っています。今こそ地域通貨というその存在というものが、意味があるものになっているんじゃないかと思います。

それから「ひとづくり」という意味では、例えばヘルスリテラシーを上げていくというような点で、伊達市の場合は本当に歩いている人が多くなりました。市民に関心を持ってもらうために、健幸ポイント制度というのを国の実証実験で伊達市もやっておりますけれども、ある種のヘルスリテラシーが上がっていると思います。

【保健師への期待 － スペシャリストの知識を生かして施策を創る】

保健師という資格は非常に立派な資格だと思います。昔、無医村では保健師が公衆衛生を担っていました。

伊達市でも、「元気づくり会」として、町内会集会所で集まってもらって、保健師が指導しています。ある程度になったら保健師が指導しなくても、「自分たちで、やってくださいね」というのを5箇所でつくりましたが、非常に好評です。

保健師は、今は行政的にまちづくりまで含めてやらなければならないということになっています。私は保健師のスペシャリストとしての知識を活かして、ゼネラリストは、施策屋にならなければいけないのではないかという風に思っております。

私は、我が市でも部長になるような保健師が出てきてもおかしくないのだということを思っております。

最後に、伊達市では「健幸都市宣言」というものをつくり、私も非常に気に入っておりますので、皆さんにご紹介して、私の話を終わらせていただきます。　（了）

伊達市健幸都市宣言

平成23年11月3日

この世に生まれて　子どもを育て　そして年老いていく　私たちの人生
その人生を　心豊かに　安心して暮らせること
それが　私たち　みんなの願いです

そうした幸福の源は　健康です

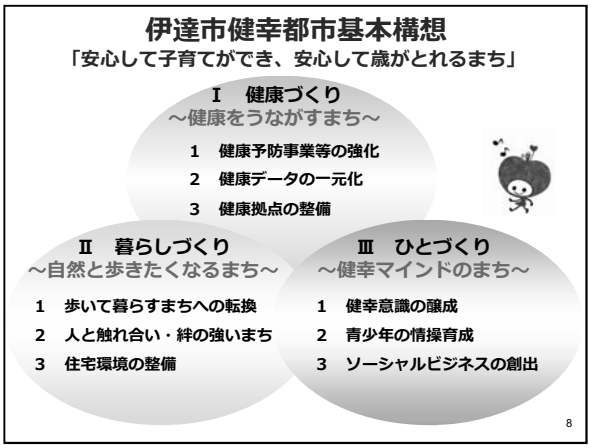
健康は　市民一人ひとりの取り組みによる果実であり
歩くことを基本とする　たゆまぬ努力によるものです
そして　その健康という果実は
これからの社会を支える　大きな力となります

私たちは　歩くことが生活の基本であったことを
いつの間にか忘れてしまいました

車社会の便利さに浸りきった生活から
風を感じ　季節を感じながら
歩いて暮らすまちに　戻りましょう

そこには　人との出会いがあり　絆が生まれ
そこに住むことで　健康になれるまち
そういうまち　健幸都市に　故郷を変えたい

私たちは　これからの高齢社会に向かって
誰もが健康で　安心して暮らせるまちの建設を目指し
ここに　「健幸都市」を宣言します



日本一の“健幸都市”を目指して　～伊達市の取り組み～

伊達市健康福祉部健幸都市づくり課健幸都市推進係
主幹兼健幸都市推進係長(保健師)
長沢弘美氏

仁志田市長の打ち出す様々な健康施策の実現に向け、保健師として取り組んできた長沢氏。
震災後、放射能への心配から「原発対策が先ではないか」という市民の声の中、市長や建設部等、他部署の職員らと共に何度も説明会に出向き、健幸都市モデル事業の必要性を伝え、ワークショップを繰り返し、やがて市民が主体的に取り組むまでになった。
放射能問題も重要だが、同時に将来を見据えれば、少子化対策や高齢化問題の解決も先送りにはできない。市民の健康のために、保健師として何を大切に、どのように実践したのかについて紹介した。

※以下、当日講演内容の抜粋

市街地モデルとして「掛田地区」を健幸都市モデル地区として設定させていただいて、その中で行ってきたことを報告したいと思います。
掛田地区は、23年3月の原発事故により特定避難勧奨地点となった(避難をしなければならない地点)隣の地域です。
市民の方々の心配が非常に高かった地域で、当初は、大反対が起き、商店街に反対ビラが100枚ほど貼られた状況でした。

【原発事故直後で強い反対に直面。しかし、まちづくりをやめるわけにはいかない】

「歩いて暮らせるまちを目指している。健幸を軸とする安心して暮らせるまちづくりのモデルとして取り組もう。」「皆が歩いて商店に行ったり、集まってお茶を飲んだりしているような、そんなまちをつくろう。」と市民の方に提案しました。
しかし、商店街に貼られた反対ビラを見たり、反対署名が集まっていることから、事態の困難さを改めて認識したりしました。
けれども、放射能問題と少子高齢化問題は別問題です。放射能問題へのフォローは、しっかりしていかなければいけない。と同時に少子高齢化問題というのはこれから先、将来に向け重要な取り組みです。健幸都市は、時間のかかる「まちづくり」です。ですから「やめるわけにはいかない」「とにかくやらなければならない」と考えていました。
モデル地区説明会では、「何をやるのか」「放射能対策が先」「放射能がこんな騒がれているのに、何故今、健康づくりなのか」など、いろいろな声もありました。
しかし、このような声の中で「もちろん放射能問題も対策しながら、これからの少子高齢化に向けた地域をつくっていくために、皆さんとやっていきたい、そのモデルとなってほしい」という説明を続けました。

【ワークショップを通して、市民にも変化が】

地域の集会所単位に説明会を開催しました。健幸都市推進室だけではなく、建設部の都市計画、土木の職員も共に地区に入って、説明やワークショップを繰り返しました。

「この掛田地区で、ずっと健康で、この住み慣れたところで住んでいくにはどうしたらいいか」「どんな掛田にしていったらいいのだろう」掛田地区の魅力を出しながら、話し合いを重ねました。

すると、反対していた方も、5回、6回と重ねるうちに「この自分たちの地域で何をしなくてはいけないか」という意見を語るようになりました。

「自分たちが今住んでいるこの地域で、永くいつまでも元気に過ごしていくためにどうしていったらいいか」と市民の方々の思いが出てきた、そうしたことを言葉にしてくれるようになったと思っています。

【反対のビラを貼った市民が、やがて推進力に】

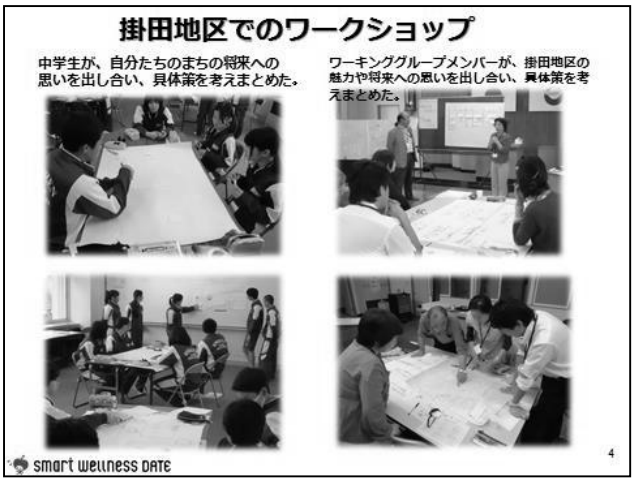
ワークショップの中で、中学生から「今の掛田にずっと自分も住んでいきたい」という声があがり、この子供たちに今の掛田を残していくために自分たちが何をしなくてはいけないかというような話し合いができるようになりました。

ワークショップが終了し、具体的計画もでき、自分たちでポスターを作ろうということになりました。「掛田のモデル地区で健幸なまちを目指します」という手作りのポスターです。

ところが、そのときはまだ、反対のビラが貼られていたままでした。反対していた市民の方が、ビラを剥がし、今度は「健幸都市を目指す」というポスターを貼ってくださるということがありました。

実は、その方こそ、今はこの健幸都市のモデル地区にはなくてはならない存在の方です。

自分たちの地域を大事に思う思いがあったから、「この住み慣れたまちに住み続けたい」という気持ちと１つになり、大きな力となったのだと思います。現在では、地元の方々でＮＰＯを設立し、健幸都市のモデル地区として、主体的な活動に発展してきています。



【モデル事業を通して、地域の協議会が健康サロン開催へ】

中山間地にある白根地域もモデル地区として、掛田地区とはまた違った取り組みとなっています。農業が盛んなところで、豊かな自然環境に恵まれた地域であり、市民の方が夜に集まりワークショップを重ね、計画をつくりました。

住民調査も行い、白根地区にサルコペニア肥満が多いことや、低体力が非常に多いこと、高血圧のリスクが高いというような健康問題が明らかになりました。
この自分たちの健康問題から何が必要かと話し合ったところ「集会所単位に健康づくりをやっていこう」と市民の皆様から出てきました。

「自分たちはこの地域で元気で暮らすため何をしなくてはいけないのか」と協議会の方々が中心となって、集会所単位で健康サロンを開催しております。協議会の方たちが主体となって中山間地域の健幸都市モデル地区として、プロジェクトを進めています。

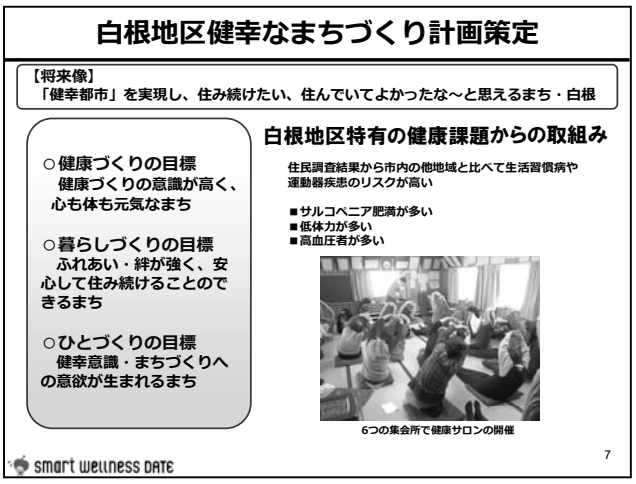
【課題があるから、やり甲斐がある】

これからは「健幸都市」という新たな考え方で、健幸なまちづくり施策をしていくことを、広く市民の方々に広げ、元気な高齢者をいっぱいにしていきたいと思っております。

「健幸都市」というのは健康づくり分野だけではできません。まちづくり、市民協働等様々な部署が関わった中で、総合政策としてまちづくりを進めていかなければなりません。

あらゆる視点に健幸都市の考え方を入れながら、全庁的に健幸なまちづくりを目指すには、調整が重要です。課題はありますが、難しいことが、あればあるほどやり甲斐を感じます。健幸都市の実現に向け、モデル地区での取り組み成果を活かし、全市展開として推進していきたいと思います。以上で報告を終わらせていただきます。

（了）

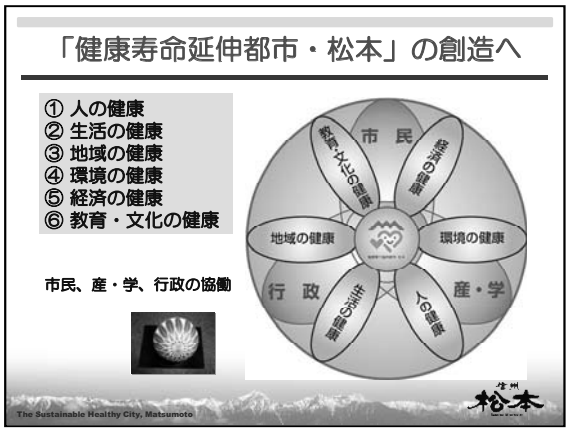


自治体と企業の協働による健康づくり ～松本市での取り組み～

松本市健康福祉部健康づくり課 課長補佐(保健師)　加藤琢江氏

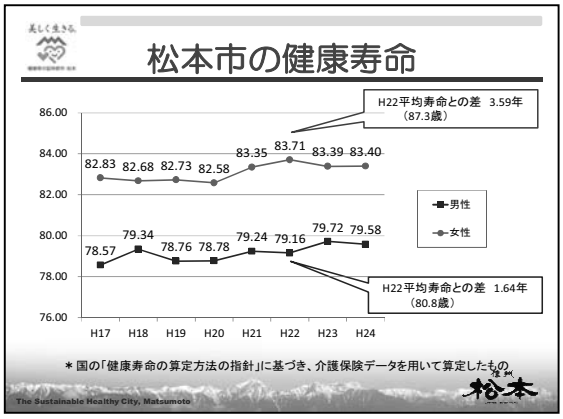
「健康寿命延伸都市・松本」を掲げる松本市では市民協働の地域づくりに加えて、健康・医療産業の創出、企業との連携を積極的に推進している。
保健師たちは、市の施策を健康づくりにおいた方針に基づき、ローソンや信用金庫と連携、広がりのある保健事業を先駆的に展開している。これからの保健活動では、企業との連携が欠かせない。市民協働を土台に、市民目線で企業と連携する松本市の取り組みを紹介した。　※以下、当日講演内容の抜粋

松本市は「健康寿命延伸都市・松本」を市の総合計画において、市の目指すべき将来の都市像として掲げています。
「松本手毬」をモチーフに、人の健康を基礎として、人・生活・地域・環境・経済・教育という6つの健康をまちづくりの目標とし、様々な分野で連携し進めていくものを図式化しています(右図)。こうした6つの健康の実現のため、「地域づくり」を基盤に置いています。「地域づくり」という根っこを大切にしながら、この6つの健康づくりを柱に進めてきています。



【地域づくりの柱は“地域の力”】

松本市が大切にしているのは、地域力です。地域づくりの柱になる地域の皆さんの力です。松本市には従来から様々なコミュニティがあり、福祉の拠点である「福祉ひろば」や、生涯学習の拠点となる「公民館」が市内の35行政区全てに設けられています。また、大学・民間企業も含めた、地域の様々な社会資源、地域力とつながりながら、健康づくりの取り組みを進めてきています。



【庁内他課と連携し、ローソンや信用金庫と協働】

市の重要施策に「健康、医療産業の創出」があります。市では新たな分野での健康づくりの取り組みを進めるため、庁内に「健康産業・企業立地課」を新設しました。ローソンとの連携・協働のきっかけは、「健康寿命延伸都市・松本」を持続可能な形で推進するため、産業化などによって支える仕組みづくりについて検討する会議である「世界健康首都会議」にローソンの鈴木ＣＥＯ補佐(当時)が、健康経営の講演のための事前打ち合わせでお越しになった際、健康づくりに関して協働した取り組みができないか、というご提案をいただき、健康産業・企業立地課と連携し実現に向けた検討が始まりました。庁内のこうした部署との連携は、「若い時からの認知症予防ポイントプログラム」や、「がん検診」などの保健事業において、ローソン以外にも信用金庫等、その他企業との協働も得られています。

【協働の目的やメリットを徹底的に話し合い】

今回、ローソンとの連携にあたり、ローソンとの連携事業を先行実施していた尼崎市への視察をはじめ、連携するメリットや目的などについて、ローソン側と市側において、3か月ほどの短期間で様々な議論を幾度となく積み重ねてきました。

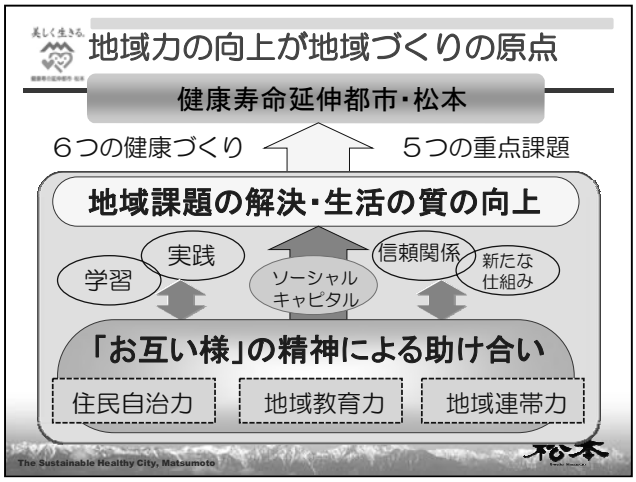
お互いの「Win-Win」をどこに置くか、ともに目指す方向、目的を確認しながら進めました。市側から見たメリットでは、コンビニエンスストアのネットワークの強みを生かし、日頃の業務では出会えない層へのアプローチができるのではないかと考えました。若い男性や主婦層など、いつもは出会えない市民の健康づくりの動機づけや健診の受診率の向上等の具体的な成果につながるような取り組みを目的にしました。
ローソン側においては、目指す経営方針の「マチの健康ステーション」のイメージ強化を図ることを目的に、お互いの目指す方向を共有していきました。

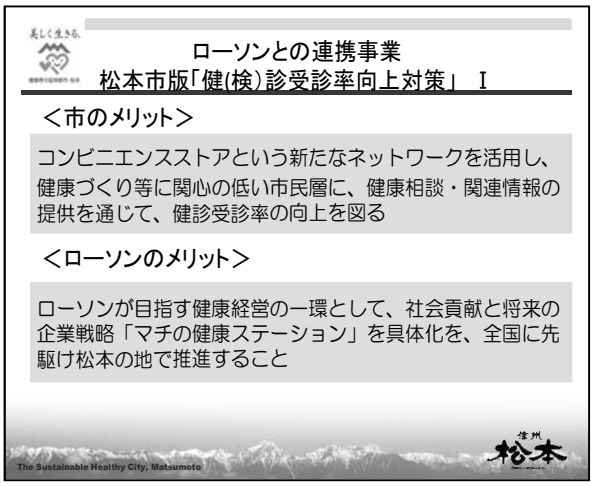
若い世代へのアプローチと、健診へのいざないを柱に、具体的には従来から市で取り組んできた事業「まちかど健康相談」を生かし、コンビニでの実施形態に応用させました。具体的な取り組みも明確にしながら、約3か月の検討を経て平成25年11月にローソンと連携協定を結びました。

【対象に併せた事業展開の重要性について学ぶ機会に】

今回の取り組みを通じ、保健師として改めて強く感じたのは、目的や得たい成果を具体的に焦点化し、事業を進めることの大切さです。日ごろの事業では、焦点の絞込みが曖昧になってしまいがちです。今回の連携により、データに基づいたマーケティングの視点は、目的・成果に近づけるため、対象や内容等を具体的に展開する上で、重要であることを学ぶ機会となりました。今回のまちかど健康相談は、体組成測定を主に、アルコールパッチのような簡単な健康チェックをオプションにし実施をしました。店内をはじめ、広報紙など、様々な媒体で周知しています。

協定締結後、初めての「まちかど健康相談」を26年3月に行いました。駐車場に設置されたテントで行った相談に、2日間で200人余の多くの来所がありました。当初の目的であった若い世代の来所より、高齢者の来所が多かったという結果にはなりました。その結果をデータ分析し、さらに若い世代の来所を多くするために、より具体的な対象として、主婦層をターゲットに平成26年度に「まちかど健康相談」を10回開催しました。近くの保育園や児童センター等、若いお母さんたちが集まるところへ声をかけたところ、初回は3割ほどだった若い人の割合が、4～5割くらいとなり、友達同志誘って来所したお母さんたちもいらっしゃいました。また、健診の受診率向上のため、相談会場で検診の申し込みを直接行う体制を整え、2割程度の人が申し込みをするという成果も出ています。



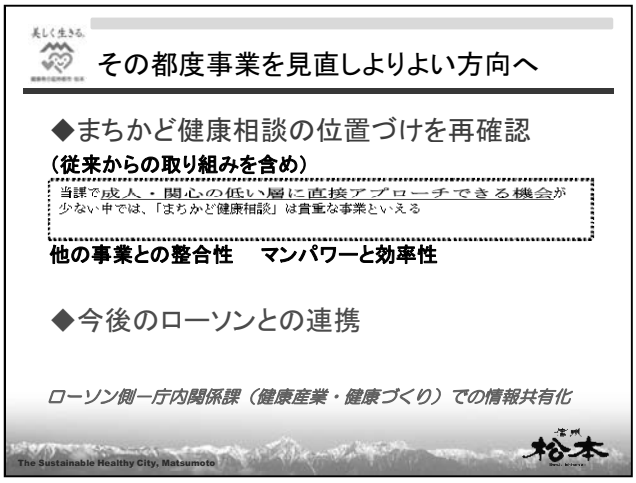


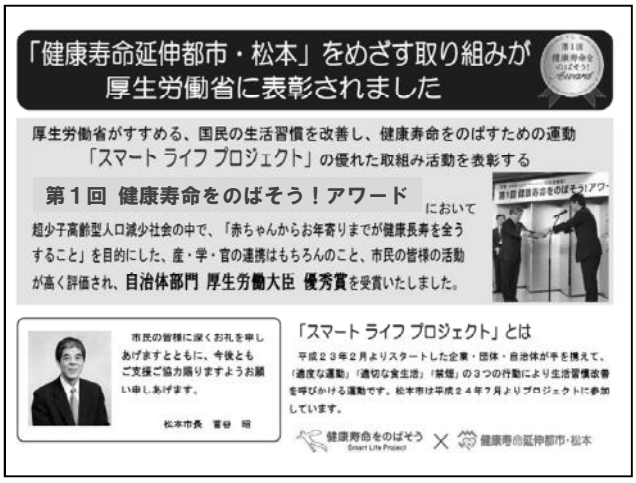
【コラボの基本は、“投げられたボールはまず受け取る！”】

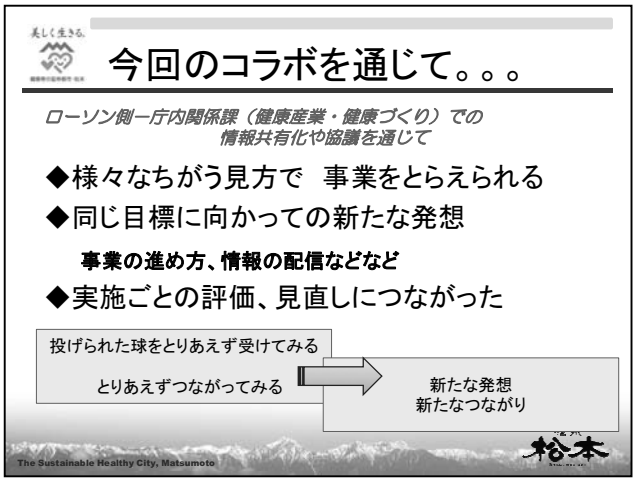
今回のコラボを通じて、「投げられたボールは、とりあえず受け取ってみよう」、「とにかくつながってみよう」というつながる意識を持ち、つながることで経験のなかった新たな見方や発想を学べたと思います。今回の取り組みは、従来からあった事業だったのですが、連携をきっかけに改めて目的が明確となり、事業の見直しにつながりました。現在、連携事業は「まちかど健康相談」だけではなくて、店舗駐車場で巡回の検診車による胸部レントゲン検診の実施や、市の健康情報を配信するため、店内で情報を掲示したりチラシを配布いただいております。

この取り組みも３年目となり、楽しみにしていただいている地域の皆さんがいます。忙しい業務の中で、職員の中でも「この業務を今後、続けるのか」という意見もありますが、こうしたことも、目的に照らし合わせ今後評価し明確にすることが必要と考えます。

私たち保健師はいろいろな庁内外の関係機関、地域の資源、地域の住民と行政とをつなげることのできる唯一の職種と思っております。つながりの中で、地域の皆さんからいただいたエネルギーや気づき、取り組みを、また次のつながりに活かしながら、新しい取り組みができたらと思っております。ご清聴ありがとうございました。（了）







自治体と企業の協働による健康づくり ～松本市での取り組み～

株式会社ローソン 顧問　鈴木清晃氏

松本市をはじめ、さまざまな自治体と協働し、他社との連携も踏まえて、革新的なヘルスケア事業に取り組んできているローソン。2012年からは、社長自らが「健康経営」を牽引。2015年からは、CHOも兼務し、社員の様々な健康課題に取り組んでいる。
時代は「治療」から「予防」にシフトしている。まさに保健師・管理栄養士の時代として、その理念を紹介した。
※以下、当日講演内容の抜粋

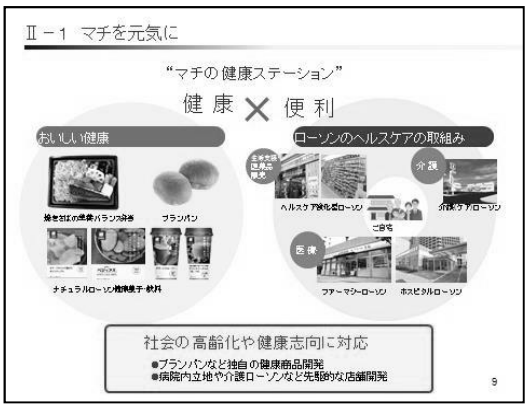
【マチに暮らす全ての人を幸せに】

今日は、この様な貴重な機会を頂きました事を、先ず厚く御礼を申し上げます。
「ローソン」は、全国に12,300店近くのお店を展開させて頂いています。
「企業理念」は「私たちは“みんなと暮らすマチ”を幸せにします」。
ローソンが、お店を営業している「マチに暮らす　全ての人を　幸せにしたい」という思いを、日々具体化し、今年「創業４０周年」を、迎える事が出来ました。
2013年から、ローソンは「健康経営」を強力に進めてまいりました。「健康経営」を意識した「ポイント」は2つです。

1つは「未来は予測出来る（予測する）」こと。Ｐ．Ｆ．ドラッカーが「創造する経営者」の中で「すでに起こった未来は、体系的に見つける事ができる」と書いています。
厚生労働省も公表している人口推計を見ますと、1990年から見て2010年、そしてこれから先の2025年、2060年、我々がやるべきことは明確になる（なっていた）のです。

次のポイントは、ハーバードのマイケル・ポーター教授の「今日では、21世紀の医療技術が、19世紀型の組織や運営、支払方式で提供されていることが多い」という指摘です。わが国でも、40兆円の医療費の3分の1は生活習慣病、すなわち早くから様々な手を打てば、より安く、早く対処が出来る方々に多くの医療費が費やされています。糖尿病の場合、透析で年間500万必要とされる方が10万人いらっしゃいます。大学を出て社員として入社し40年近く勤められる間、「ずっと元気で在り続ける事」が、企業にとって「最高の価値」となるのです。「医療費の増大」だけでなく、「仕事の生産性」「強い組織」「良い会社」にどれだけプラスになっているか、という事を「長く、高く、深い目」で考えれば「社員が健康であり続ける」という事が、実は「ヒューマンキャピタル（人への投資）の最大化」になるという事が判ります。これが「健康経営」なのです。
当時この２点について社長とミナケアの山本社長（東大医学部、大学病院勤務後、ハーバードでマーケティングのMBAを取得、帰国後、ミナケアを設立）が話され「具体的な行動が必要な時は今だ！」の思いを共有したのが、発端です。
現在、経済産業省が「健康経営」の展開、厚生労働省が「データヘルス計画」の深耕を進め、「治療から予防へ」「健康寿命を延伸」と、国民が健康であり続ける事への、支援強化と、社会システムの転換を進めておられます。
企業も地方自治体も、ここに向かってベクトルを合わせて行く時が来たと思います。
その中で、ローソンは「点」の戦略として、「お店の商品・サービス」を「マチの健康ステーション」の軸で、更に深耕して行こうと、様々な取り組みを進めてまいりました。

「糖質74%オフのブラン入り粉」を開発した鳥越製粉さまと組んで「“ブランのパン”」を商品化。糖尿病の患者さまや関係の皆さまから、圧倒的なご支持を頂きました。
ようやく「買い続けて頂ける」健康に良い商品をご提供する事が出来たのです。
　また「野菜から健康に」を目指し、「ローソンファーム」の拡充「野菜の品揃えの強化」そして「ナチュラルローソン」「成城石井」との連携を強化等、「マチを元気に」する新たな取り組みに次々に挑戦しています。



【人を活かす － 健康経営 】
「点」としてお店の商品、サービスを強くし、それを更に「線」に、長く、広く展開するには「人」が何より大切で「力の源泉」となります。
　社長が一番辛かった事は「社員が不幸にして亡くなられた時に告別式にお伺いし、奥さまから『もっと普段の食生活や、健康に気を付けていたら良かった』というお話を伺う事だ」と話していました。本当に、この様な辛い思いは二度としたくない。縁が合ってローソンに入社した仲間（社員）全員が、何時も、何時までも、元気で、健康で、仕事をし続けられる環境を創らなければならない。今後『誰ひとりも、損なってはならない』とも、話していました。
　具体的には健康保険組合と連携し「健保施策の改革」を進め保健師、管理栄養士の皆さまと一体になって「健康経営」に取り組むこととしました。また、様々な知見をお持ちの他社（ミナケア・タニタ・ルネサンス等）の皆さまと組んで、新しい取り組みを検討し、展開致しました。2012年には、経済産業省の指導、支援を頂き「公募事業」として独自の「健康アプリ」の開発「健康アクションプログラム」の展開を進め、対象者の約6割の方の改善に結び付ける事が出来ました。

　具体的には、独自に開発した「アプリでの健康アクションプログラム」を270名の対象者に配付。「日々の体重」「食事のカロリー」「歩数」の3つを毎日記録し、管理する。歩数は「タニタの歩数計」をローソンのLoppiで簡単に読み込み、アプリへ集約、確認が出来ます。食事のカロリーは、写真や商品のバーコード、テキストからカロリー量を読み取りコントロールすると共に、課題毎のグループに「新商品のおすすめメニューを提供」食へのアドバイスを継続的に行いました。それらを通じ「カロリーを管理する事」「歩く事」「体重を計る事」の3点で徹底的な指導、支援を続けました。また「ご褒美クーポン」でのインセンティブ「保健師指導の連携」等、参加し、継続したくなる様々な仕掛け、そして「習慣化への仕組みづくり」を、
多くの皆さまのご支援を頂き、実施致しました。

　また毎月、月次レポートを届け、意識を醸成する事も行いました。健保のデータでは、72名の高リスク者の方が1年経過後に、正常値になったという成果に結びつきました。
　このプログラムの展開前に、全社員に社長からの「定期健康診断を受診しない社員、再検査の指摘事項にノーアクションの社員」にはディス・インセンティブを課すという、「経営の覚悟」のメッセージも出しました。社員も、会社も、健保も、人事も、組合も一体で「健康経営」を進めるというものでした。

当初この施策に組合の反応は厳しいものでしたが、「何より大切なことは、社員（組合員）が健康で、楽しく、明るく働き続ける事。そのためには、会社も組合もここまで踏み込まなければ、実現は難しい」との判断で、受け入れ連携して下さいました。

トップの「覚悟」「社員を守るのだという思い」が色々な施策へパラレルに反映されていく事が重要だと考えています。

この「点」から「線」の施策が、自治体の皆さまとの連携で「面」へと拡充されてまいりました。先程お話のあった松本市の平尾部長と山本先生が話され「一緒に何か出来ないだろうか」となり、松本市との様々な施策が動いてまいりました。

まず「松本市のまちかど健康相談」や「尼崎市との出前健診」を行う事によって、市としては、市民の方々の健康経営に1歩でも近づいていく、ローソンは「マチの“健康”ステーション」を具体化していく、という事で「健康協定」を締結し、ローソンのお店、商品と市民の皆さまの「健康」を守る施策が様々に具体化されてまいりました。皆さまの様々なご要望、ご意見を頂きながら新たに佐賀県内や石川県内の、地方自治体さまとの連携を拡充し「面」の充実を図っています。

「健康アクションプラン」を通じ、「ヘルスケアデータ」を確実に集め、解析、分析し、必要な方に「適切な食や運動、習慣を変えるメニュー」を提供し、様々な企業が、健康への商品やサービスを地方自治体をベースに連携し、確実な成果に結び付けて行く事が可能となり、重要になってきました。更には、その動きを加速するために、「スポーツのイベント」や「健診」や「日々のフィットネス」を繋ぐ「ヘルスケアポイント」の展開が求められています。

企業も自治体も市民、あるいは社員も一体になった「健康保健指導の善循環モデル」の構築が急がれます。

ローソンは昨年、経済産業省さまの「健康経営銘柄」を頂戴致しました。本当にありがたく、更に「健康経営の価値創造」に挑んでまいります。

【トップは覚悟を持って健康投資を】

重要な事は「いかなる未来を、今日の思考と行動に折り込むか」です。

「健康を守る（ヘルスケア）」ことは、コストではなく「健康・成長への『投資』」です。

社員が65歳で退職するまでの40数年間、健康であり続けて頂く事は、経営の最大の投資です。

そのためには包括的な、俯瞰した戦略が、今こそ必要です。

保健師・管理栄養士の皆さま方が前面に立ち変革を進めて行く。同時に国民あるいは、社員一人ひとりが自立して、健康は「自己責任」だという事を常に考え、求め続けていく事が出来る仕組みも必要です。「やってくれないからできない」という言い訳「あなたがしないから、ディスインセンティブなのだ」「なぜ健診に来ないのだ」という、これまでの繰り返しにしてはなりません。

最後に「データヘルス計画」。この必要性、重要性を最近強く考えます。

個人も、組織も「具体的成果」が見えないと動き始めません。正しい「現状把握」と「分析」「課題解決」「評価」が何より重要です。今日お集まりの保健師の皆様方が「国民（市民）（社員）を守るのだ」という思いを定め「データヘルス」に基づいた保険医療の、新たな時代に取り組んで頂きたいと思います。

本日は、本当にありがとうございました。今後もローソンをご愛顧ください。

また、ブランのパンをまだ召し上がっておられない方は、本日のお帰りに近隣にございますローソンで是非お試しください（笑）。ありがとうございました。　（了）

シンポジウムまとめ

コーディネーター

一橋大学大学院社会学研究科　教授　猪飼周平氏
日本看護協会　常任理事　　中板育美

猪飼周平氏

午後にまたお話する機会があります。ここでは、小括的にまとめたいと思います。

ネットワーク論等の社会学の理論で「ソーシャルキャピタルがあるとすごくいい」とわかっているのですが、どうしたらできるかというと、「つくるの難しい」という話で終わってしまうのが学問の現状であり、限界なんです。

ところが保健師の歴史を振り返ってみると、そういう人の関係や、メリットというものをつくっていくということに成功してきた歴史を持っているわけです

そこの部分を大切にするということ、それを自分たちの町にそれがどういう形で残っているだろうかということをもう一度見直してみるということが、今回の伊達市での取り組みを受け止める側としての、ひとつの考え方だろうということが1点。

また、住民はいかに動くのかということを考えた時に、インセンティブということが話題になりました。例えば金銭的なインセンティブだけでは動かない人たちが、たくさんいます。それは単なる健康の問題として存在しているのではなく、生活全体の中で、複雑な生活の絡み合いの中で、アウトプットとして出てくるということです。

face to faceのコミュニケーションの積み重ねがなければ、複雑な形で問題を抱えている人たちの状態を改善していくということは本質的にできないのです。

その論点の中に実は「まちづくり」というところが健康との関わりで出てくるわけです。人々がいろいろな形で関わり合いながら、皆で健康になっていくということは、インセンティブを広い観点から理解していただくといいのではないかと思います。

松本市のローソンとのコラボレーションで、例えば予防の重要性というのは、保健師であれば以前からずっとそういう問題を考えていたことは事実としてあるわけです。

今回の関わりは、もっと大規模な、「Win-Win」の関係をつくっていくという発想です。企業であるローソンが、こういう形で先駆的に参入し、すごいなと思います。

しかし、たぶん保健師から見たら「ついに来た」という感じなのだろうと思うのです。この流れを捉えて、ある意味非常に上手に住民の健康を支えるという方法に、企業もベクトルを向けてきてくれているということを踏まえて、それと上手にタイアップをしていくということを考えていただくといいのではないかということを、ひとまずまとめさせていただきます。

中板育美

日頃から活動している時に、何かと大反対する人(住民)というのは目立つわけです。あの人を落とさない限り、うまく行かない。賛成してくれる人、応援してくれる人と同じように、保健師は反対する人も重鎮と捉えてきました。双方大事で、双方とうまく付き合う。攻撃されても、その攻撃されている人たちとも本当に本気で向き合う。住民の健康を自分が延伸していこうと、1人でも多くの人たちが、少しでも永く豊かに生きていこうと、そういうことを守ろうとする時に、私たち保健師1人ひとりに覚悟が必要であると。いろいろな人たちと、真剣に向き合う覚悟が必要なのだということが、本当に大きなメッセージとしてあったと思っております。

4人の皆様、ありがとうございました。

Ⅲ．セミナー

【セミナー開催の主旨】
～より多くの情報発信・収集と、これからに向けて～

地域包括ケアを推進するには、行政のみが推進するのではなく、関係機関や多職種との連携、市民協働も含めた多様な角度から、さまざまな取り組みが求められ、それは同時進行で３次元的に繰り広げられることが求められる。

そこで、本大会でも、参加者がそれぞれの課題意識や関心に合わせて情報収集・参加できるよう、午後からは、４つの会場で平行して同時開催とした。地域における先駆的な取り組み事例を、セミナー形式で紹介。
また、複数選択できるよう、同じ内容を１時間づつ２回開催することで、参加者がよりさまざまな情報に触れられるプログラムとした。

また、セミナー終了後は、参加者が再度、一堂に会して実践にこめられたことやポイントを振り返り、読み解き、その主旨を今後の事業展開に生かせるよう、最後にコーディネーターによる対談が設けられた。

セミナー1　体力づくりや仲間づくりがぐんぐん深まる!

地域包括ケアの実現には、一人ひとりが健康であり続けられるよう、疾病予防・介護予防の視点が求められます。できる限り要介護状態になることを未然に防ぎ、住民が生き生きと楽しく生活できること、高齢になっても、地域でソーシャルキャピタルの一員として活動できる人が一人でも多いことは、活力ある地域づくりの上でも重要です。
セミナー1では、「体力づくりや仲間づくりがぐんぐん深まる!」と題して、高知市(高知県)から、前駆的な取り組みにあった背景や現状、印西市(千葉県)からは、体操を実践している市民のみなさまによるデモンストレーションを紹介しながら、実践を共有した。

人口33万人の中核市、高知市からは健康福祉部高齢者支援課 技査(保健師)中越美渚氏により、いきいき百歳体操についての実践発表がなされた。高知市では、2002年に発足した「元気になるプロジェクト」の中で、介護認定の契機となる疾病の実態から、要介護となることを予防・改善するための取り組みが必要であることが判明。第二期の介護保険事業計画の中で、市の保健衛生部門や介護保険部門、高齢者支援部門の医師・理学療法士、保健師等の分野横断的な取り組みの中で、アメリカ国立老化研究所の運動の手引書に準拠し、いきいき百歳体操を開発した。現在は、市内326箇所で取り入れられ実践されている。科学的な効果検証も行われており、3か月間、体操を実践した90代の高齢者が、小走りできるまでに運動機能を回復した様子がビデオで紹介され、会場では驚きの声があがった。中越氏は、「虚弱高齢者も実践できる体操にすること」「住民主体をモットーに、行政はでしゃばらない」ことの大切さ、そして何より、「私たちのまちがどうなっているのかを、しっかり見て、縦割りに振り回されず、きちんと住民と向き合うことが大切」と、活動の理念を披露した。

ついで、印西市からは市健康福祉部高齢者福祉課主任理学療法士の小塚典子氏と、実際に「いんざい健康ちょきん運動」に参加している原山藹々(あいあい)会のメンバーによる発表があった。小塚氏は「印西市はまだ高齢化率が20.0%だが、今後、急速に高齢化が進む。2025年までに、いいまちづくりをしたい」とし、今後、民生委員や自治会とさらに取り組みたいとし、会場に集まった参加者と共に、実際の運動を披露。参加者らは、懐かしい歌を口ずさみながら行う静かで、簡単そうな動きにも関わらず、衰えがちな筋肉を動かし効果につながる運動となるプログラムであることを体験した。

セミナー2　地域ケア会議が肝心、要!
実践事例検討会をやってみよう

介護保険法の改正に伴い、地域ケア会議の開催が市町村、地域包括支援センターに求められています。地域ケア会議は、市町村における地域包括ケアシステム構築の重要な要として、介護支援専門員の人材育成に加えて、「個別課題解決機能」「ネットワーク構築機能」「地域課題発見機能」「地域づくり・資源開発機能」「政策形成機能」といった5つの機能が求められています。

保健師はこれまでも、事例検討会を通して、上記5つの機能を備えた事例検討会を行ってきた経緯があります。そこで、セミナー2では、日本看護協会が開発した「実践力Up型事例検討会」※の手法を活用した地域ケア会議のデモンストレーションを日本看護協会職能委員が披露した。

地域包括支援センターや介護保険部門の保健師にとどまらず、保健衛生部門の保健師や、保健所保健師等、すべての保健師が積極的に地域ケア会議に関わる意義を伝えると共に、その方法論を披露した。

セミナー2では、保健師職能委員による地域ケア会議の機能や位置づけに関する講話のあと、模擬事例「高齢で要介護の母親と、独身でうつ病をもつ同居の息子」への支援についてのシュミレーション地域ケア会議を実演した。

検討会を始めるにあたっては、司会と板書係を決め、それ以外の参加者はメモなどは取らず、ホワイトボードに集中し、事例に関する情報の整理、アセスメント、確認すべき情報の整理、支援の方向性の確認、役割の確認、振り返り・評価を行うといった一連の流れを通し検討することの重要性が伝えられた。

また、個別事例から「地域の課題」を汲み上げるには、他に同様の事例がないかを確認しホワイトボードに記載しておくことや、事例検討会終了後に同様の課題をまとめて書いておくことが効果的であることが示された。

効果的な地域ケア会議のためには、参加する全員が「自身の事例である」という姿勢で臨むこと、自分とは異なる他者の意見を非難・否定したり責めるような会にしないこと等がグランドルールとして共通認識されることが必要であると説明された。

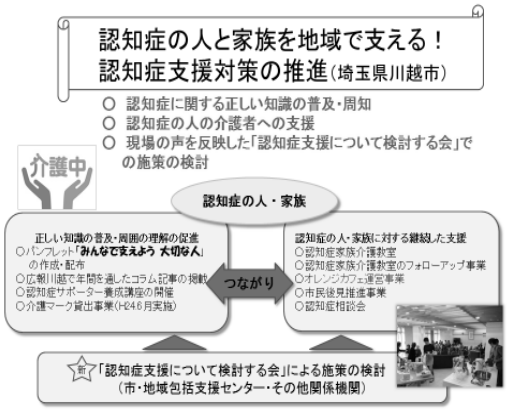
※平成26年度厚生労働省保健指導支援事業「アセスメントを深めるためのファシリテーターの手引き」:日本看護協会ホームページ参照 http://www.nurse.or.jp/

セミナー3　最前線！みんなが主役、認知症への取り組み

平成24年度の時点で、65歳以上の高齢者の7人に1人が認知症といわれており、2025年には約700万人まで増加すると推計されている。
国も「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）」を公表し、対策を強化している。
認知症への取組みは、地域全体での取組みが欠かせないことから、セミナー3では、認知症ケアに焦点を当てた地域活動が紹介された。

認知症の人と家族の会・埼玉県支部代表の花俣ふみ代氏は、13年に渡り、認知症の義母と実母の介護を続けた経験を持つ。家族会自体は36年前に設立されたもので、本部と全国の支部で構成されている。活動は「本人や家族が集まり、悩みや体験を話し合うつどいの開催や、介護体験、情報交換、(勇気のでる)会報の発行」などさまざま。本部・支部合わせて年間2万件の相談活動を行い、会員は全国に1万1千人を数える。

「自分が大変な思いをしたからこそ、今、大変な思いをしているなら、つながろうよ」という思いに端を発足した家族会。地域の認知症対策には、認知症を自分のこととして捉える意識・絆が必要と指摘。「認知症は急に何もできなくなるわけではなく、意思表示をはじめ、できることはたくさんある。何も分からないという偏見や誤解がまだまだある」とした上で、認知症の啓発は進んでいるが、家族が抱える悩みや大変さは軽減されていないと指摘。家族の身になって心をサポートしてもらえる存在が一番うれしい。悩みやつらさをカミングアウトできるような世の中になって欲しいと訴えた。



ついで、埼玉県川越市福祉部高齢者いきがい課主幹で保健師の佐藤尚美氏から、認知症高齢者やその介護者、地域住民等が集う「オレンジカフェ」の実践についての報告がされた。

認知症家族介護教室の座談会で、介護者の「(認知症の)妻も、こういう場に来られたらいいのに」という声をきっかけに、平成25年1月から認知症家族介護教室のフォローアップ事業のひとつとして事業に位置づけ、平成26年度からは「オレンジカフェ運営事業」として開催している。

平成26年度は、地域包括支援センターや介護老人保健施設等が18箇所、延168回開催。参加者は延べ3,065人にのぼった。

今年度は、開催場所も20箇所を超え、複数のカフェに参加している高齢者もいるほど。会場についても特別養護老人ホーム、病院、地域包括支援センターなどの施設に留まらず、教会の礼拝堂などで開催されているところもあると報告。カフェは、認知症の人にとって、例えば得意な踊りなどの自分のできることを他人に教えるなど、受身ではなく、家族と共に”自ら活動し、楽しめるところ”であり、同時に地域との“つながりの再構築の場”になっているとのことであった。

セミナー4　ぐらんぱが直接伝授!“ぐらんぱ”の醍醐味

高学歴化、都市化、サラリーマン化といった戦後の変化の象徴とされる、いわゆる「団塊の世代」が65歳に達し始め、毎年約100万人ずつ65歳以上人口が増加している。こうした団塊世代には、より健康な状態を維持しながら、これからの高齢社会の牽引役としての活躍が大きく期待されるものの、実際には団塊世代男性の社会活動参加は、41.8%に留まっている※。

しかし、団塊世代の男性と、保健活動をどのようにつなげることができるのか、モデルとなるような報告が十分なされているとはいえない。そこで、セミナー4では、シニア男性がその潜在力を生かし、世代交流活動を展開。育児支援活動と団塊世代の地域貢献と健康づくりがつながった埼玉県朝霞市の事例が報告された。※内閣府高齢社会白書

セミナーでは、まず埼玉県朝霞市健康づくり課保健係長で保健師の近藤悦子氏が、ぐらんぱ取組みの経緯を紹介。都心の企業戦士として働いてきたシニア男性の多くは、定年後の社会参加が少なく、また、朝霞市の統計等から急速に進む高齢化の課題として、例えば認知症の増加といった様々な健康課題が増加するのではないかと懸念されていた。

一方、朝霞市では転入し子育てする若い世代も多く、育児の孤立化を予防することも課題となっていた。保健師らは、埼玉県の健康長寿プロジェクトモデル事業実施にあたり、地域特性や健康課題を改めて見直す中で、社会経験豊富なシニア世代による育児支援活動の創設を模索した。まず「地域が求めるシニア男性の底力」と題した講演会を開催し、広く市民に案内。つぎに展開した育児支援者養成講座では、シニア層のプライドを大切に、一流の講師陣による講座や保育園での実習など30単位15日間の講座を開催した。すると1期生修了者による自主的な「朝霞ぐらんぱの会」が2か月足らずで立ち上がり、保育園、小学校、放課後児童クラブでの遊び支援や見守り、学習支援などの活動を展開するまでになった。近藤氏は「日ごろ、事業の実施や虐待事例対応に追われていたが、地域の課題から事業化することの重要性を認識した。市民のみなさんの力を実感した」と締めくくった。

引き続き、朝霞市ぐらんぱ育児支援者養成講座修了生が、「朝霞市の(保健師)企画に見事にはまりました」と笑顔で発表を開始。

初年度、15名で立ち上げた会が、現在、60歳から75歳まで合計37名までになっていることを報告。朝霞市の子育て環境の向上、子育て支援として、地域の子どもたちがすくすくと育つことへの願いをこめた活動であるとし、取組みの紹介では、子どもたちの笑顔あふれる様子をパワーポイントで披露した。

入会の理由を「実は、これまで子育てに参加してこなかったことを反省していた。市の取組みに飛びついた」と語る修了生も。

加えて、会員は自身の健康維持・仲間づくり、地域との交流、これまでの経験を発揮できる場にもなっているとして、活動は自らにとっても、メリットがあるとした。

会場では、ぐらんぱ講座修了生による実演指導もあり、参加者らは会場で皿回しも体験するなど、終始、笑顔のたえない和やかなセミナーとなった。

Ⅳ. 対　談

対 談

対談者
一橋大学大学院社会学研究科　教授　　猪飼周平氏
日本看護協会　常任理事　　中板育美

中板：本日のテーマである「地域包括ケアシステムをつくり、推進」するには、健康な人が少し健康ではない人に気を配り、優しさを届け、目を届けという、お互いに少しでもより今の健康状態を維持し、豊かに生活すること。こうしたことも含めて、地域包括ケアシステムという風に考えて組み立てました。いかがでしたか?

猪飼氏：ローソンの駐車場で健診を実施したり、高知市や印西市の取り組みでは、住民が主体になって取り組むという話がありました。双方に共通するポイントがあります。健診には、「その結果としてよりモニタリングがうまくいき、人々がより健康になる」という1つのストーリーがあるわけです。しかし、健診はそのためだけにあるのではなく、実際には二重にも三重にも活用するわけです。

ローソンと松本市の場合には、従来の保健事業では出会わないようなタイプの方たちがローソンにいるのだとすれば、そこは実はネットワーキングの大チャンスになるわけです。保健師にとっての財産になり、集団づくりをする時にコアになる人たちを見つけだすことができるかもしれない。

同じように、生活習慣病対策であっても、乳幼児健診でも、保健師は関わらなければいけないわけです。

保健事業を何重にも活用するということがすごく大事で、それは結局のところ事業としての健診というものをただやって任務を全うするという発想では、実は保健師としての本当に保健師の持っている能力とか可能性を充分に使ったということにはならないのだろうと強く感じたところです。

中板：ありがとうございます。乳幼児健診でも、健診そのものの受診率を上げることが目的ではない。あくまでもそれは手段であって、そこからどういろいろな広がり方を見せるかという、その戦略がとても重要だということですね。

そして、その戦略として持っていることが保健師として重要ということをおっしゃっていただいたと思います。

猪飼氏：先ほどの高知の事例でも、単に体操することにとどまらない。

以前、高知市に、取り組みが3年目か4年目くらいの頃にお訪ねしました。基本的な方針が揺らいでいないと今日も伺ったのですが、体操して終わりではないですよね。

体操し終わったあと、皆さんお茶の時間になっていく。つまり、家からそういう場所におじいちゃんやおばあちゃんたちを出して、人と人を繋いでいく。

保健師だけではなくて、住民同士の関係というのをつくっていく、体操で終わらない。松本市の取り組みと共通するポイントがそこにあると思いました。

中板：仁志田市長の伊達市については、まちづくり、健康づくりなのだという本当に大変な議論と、市長も保健師も住民も大変なエネルギーを使ったと思うのです。あのプロセスを経て住民の方たちは自分たちの地域をどうしないといけないか、正に自分たちで自分たちを守るという健康づくりに発展した。あれもまた1つのきっかけだったのだと思います。

猪飼：日本看護協会が公表した「看護の将来ビジョン」ですが、これは実はセッションのセミナー2と関わります。非常に積極的な内容だと理解し、非常に感銘を受けました。「生活を重視する保健医療福祉制度への転換」を打ち出し、それを踏まえた上で、地域包括ケアシステムを捉えている。国のものよりも包括的で、一般性・普遍性の高い内容になっている。意図を簡単にお話しいただけますか。

中板：2025年というのは1つの目安で通過点。その中で私たちが今何を大事にしなければならないか、学識や専門家も入って話し合いを繰り返し行いました。

正に看護という目線で、地域包括ケアというものがいったい何を守り、何を達成しなければならないかと考えた時には、到達するのは1つの領域ではない、どう考えても1世代ではない。いわゆる地域包括ケアシステム今の本当に喫緊の課題が、その中には、障害のある人も、難病の人も、若くても、子どもも同じように地域で包括的に守られていく必要があるのではないか。議論を重ねて、そのような結論に達して行ったのは、自然の流れではなかったかと思っております。

2025年に向けた看護の挑戦　看護の将来ビジョン
(日本看護協会:http://www.nurse.or.jp/home/about/vision/index.html)

猪飼：今のお話の少し理論的なバックグラウンドというのを考える必要があると、かねてより思っています。

地域包括ケアが高齢化での対策として打たれている施策であるとします。

そうだとすると、高齢者に対するケアシステムになるというのが当然、自然の流れです。高齢化が問題なのだから、日本看護協会が定義をしたように、この社会に生きる全ての人が、実は包括的なケアを必要としているという認識のためには、高齢化でそれを説明するというのは、実はやや論理的にはおかしいということになりますよね。

公衆衛生というのは歴史的に言うと19世紀の中頃から本格的にイギリスでスタートして発展してきた歴史があるのです。

それを積み重ねてきた結果として、実は単純なアプローチ、多くの人たちに一斉に働きかけて改善できるような問題というのは、今日かなり少なくなってきている。

私が保健師にすごく期待をしているというか、僭越なのですが、保健師というのは戦後最初にできたソーシャルワーク職種でもあって、そうした複雑な問題を解く、あるいはそれにぶつかって行くという、わが国における最も伝統的な職種だと思うのです。

今日、地域というものが見えなくなり、ソーシャルワークのできなくなった保健師がいる。

統計的なもの、疫学的な手法に強く依存するようになったり、あるいは事業をこなすということで精一杯という保健師もいます。

まちづくりというのはそういう保健とは違うと、僕は思っています。

なぜまちづくりが重要かというと、複雑な問題というのはface to faceでないと絶対解けない。一方で、限られた保健師数だけでそういった問題を全部ケアできるかというと、そんなことはない。人と人が繋がっていく力を存分に使うということの先にしか、解決策がないのだとすれば、やはり保健師というものは、統計手法に依存した形から、ある種伝統的な保健師の在り方というものの価値をもう1回見直すということが大事なのだろうなと。これは今日の全体的な感想です。

中板：そういう意味ではセッション2のところ、地域ケア会議のところも1つヒントになると思います。地域ケア会議というのは正に今、地域包括ケアで、高齢者のところで非常に要になっていく1つのポイントだと思います。その人の生活をどう支えて、よりQOLを、病気があったりしてもケアを受けていても自分なりの要望が通ったり、自分なりにいいケアができるようにするためにはどうしたらいいかと考える時には、看護ケアのことだけではなくて、ソーシャル的な改善策も必要になってくるわけです。

猪飼：ぐらんぱの取り組みも、活動しておられる方たちが元気を保つということと、子供たちを支えたり、多世代の交流みたいなものを支える取り組みというのは、1つの可能性というか、それに保健師が関わったというのは、素晴らしい取り組みだと理解しています。

中板：ポピュレーションとハイリスクをうまく連動させながらやっていく、まさにそれが保健師の活動です。事業に没頭して、事業をこなすだけという保健師では、行政にいる意味がありません。

事業を通してでも個別のケースを通してでも、そういったところから事業をもう一度見直していく、あるいは新しくしていく、必要なものに変えていくというアクションを起こす、そういう保健師活動をぜひ見出していただきたいと思います。

複雑な課題を抱えながら落ちていく人たちがいる。そういった落ちていく人たちを置いてけぼりにする一次予防、健康づくりでは本末転倒だと思います。そういった人たちが落ちていかないような仕組みをどうしていくかということも含めて、ぜひ皆さん自分の地域の中で考えていただきたいと思います。

本日はありがとうございました。

V. 資　料

参加者数

平成27年10月24日（土）開催 ＠日本看護協会ビル
「コラボが生み出す健康づくり 未来のチカラ 2015」

<参加人数集計>

2015/10/26作成

来場者数	計
	192
一般参加者（事前申込123，当日申込9）	32
シンポジスト	4
コーディネーター	1
セミナー発表者	24
タニタ （健康機器デモ）	2
サポートスタッフ （看護大学院生）	7
日本能率協会総合研究所	9
日本看護協会 （理事含む）	13

※（参考）一般参加者　事前申込148名　欠席25名

セミナー	1回目	2回目	計
参加者数	132	132	
セミナー1（JNAホール）	44	52	96
セミナー2（3F）	21	32	53
セミナー3（6F）	34	25	59
セミナー4（7F）	33	23	56

セルフ健康チェックコーナー	計
延べ人数	337
ストレス測定器	65
血圧・血流計	83
骨健康度測定器	81
脳年齢計	69
体脂肪・内臓脂肪計	39

※実人数は130名程度

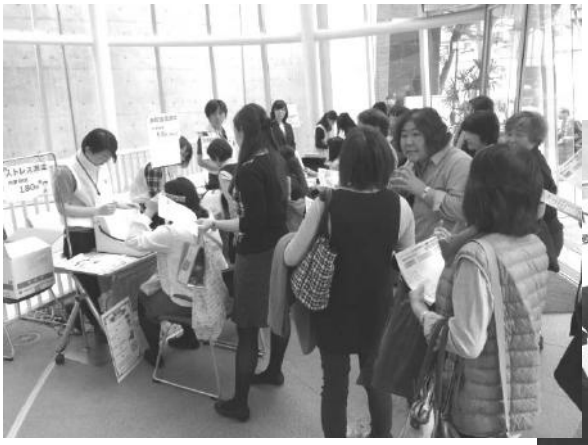
その他	計
タニタ（脚部筋力バランス測定）	約50名
報道機関（来場）	9社　13名
〃　（資料送付希望）	1社

セルフ健康チェックコーナー

本会ビル1階エントランスでは、保健師らによる無料のセルフ健康チェックを実施した。
これは、表参道を道行く一般市民を対象に、少しでも健康に関心を持ち、自身の身体の状態を知ってもらうことを目的に開催。
訪れた人々は、血圧測定や体脂肪計やストレス測定などを体験し、保健師による説明を受け健康への関心を高めていた。

測定機器	参加数
ストレス測定器	65
血圧・血流計	83
骨健康度測定器	81
脳年齢計	69
体脂肪・内蔵脂肪計	39

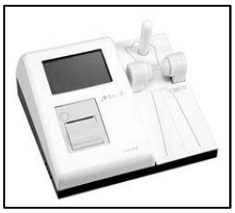
●開催場所：１Ｆ受付フロア
●開催時間：１１:００～１４:００
●来場者：一般来場者及びセミナー参加者
●来場者数：337人（延べ人数）



●設置した測定機器

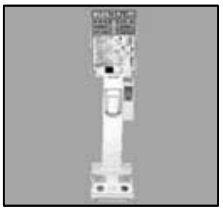
ストレス測定器

血圧・血流計



骨健康度測定器

脳年齢計



体脂肪・内蔵脂肪計

アンケート結果

1. アンケート概要

対象	2015年10月24日開催の「未来へのチカラ2015」参加者
方法	自記式アンケート （受付で配付資料にアンケートを同梱し、退場時に回収。謝礼として3色ボールペンを進呈。）
内容	・「未来へのチカラ2015」の認知経路 ・当日参加したシンポジウム、セミナー ・プログラムを通じた今後の取り組みへの活用 ・プログラムを通じて感じたこと・得られたこと ・プログラムへの感想、看護協会への期待（自由記述） ・その他気づいた点（自由記述） ・保健師の仕事への関心（保健師以外の方） ・回答者属性（在勤・在学地／所属／職種／年齢／看護協会会員・非会員）
回収数	回収数：118名 回収率：89.4% （当日参加者数：132名）

2. 回答者属性－①

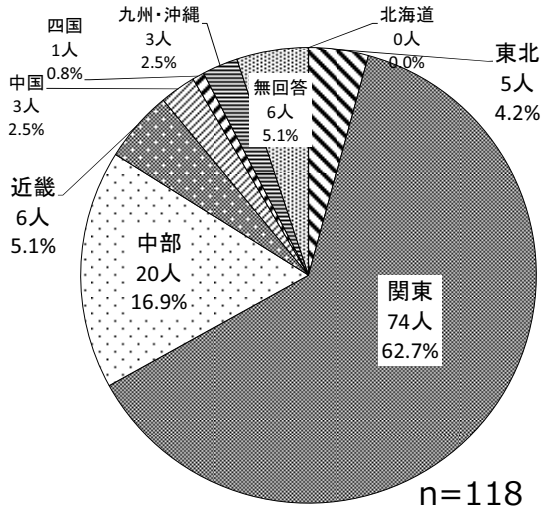
●在勤・在学地は、「関東」が6割を占めている。また、東北や中国、四国、九州からの参加者もいる。

●所属は、「市町村」が6割を占める。

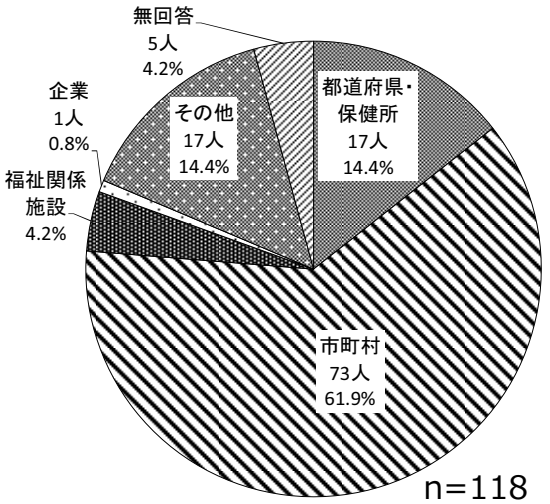
●職種は、「保健師」が8割を超える。

都道府県	件数	比率(%)
青森県	1	0.8
山形県	2	1.7
福島県	2	1.7
茨城県	6	5.1
栃木県	4	3.4
群馬県	2	1.7
埼玉県	15	12.7
千葉県	16	13.6
東京都	22	18.6
神奈川県	9	7.6
新潟県	1	0.8
福井県	1	0.8
山梨県	4	3.4
静岡県	5	4.2
愛知県	5	4.2
三重県	4	3.4
大阪府	3	2.5
奈良県	2	1.7
和歌山県	1	0.8
鳥取県	1	0.8
島根県	1	0.8
山口県	1	0.8
高知県	1	0.8
福岡県	3	2.5
不明	6	5.1
計	118	100.0

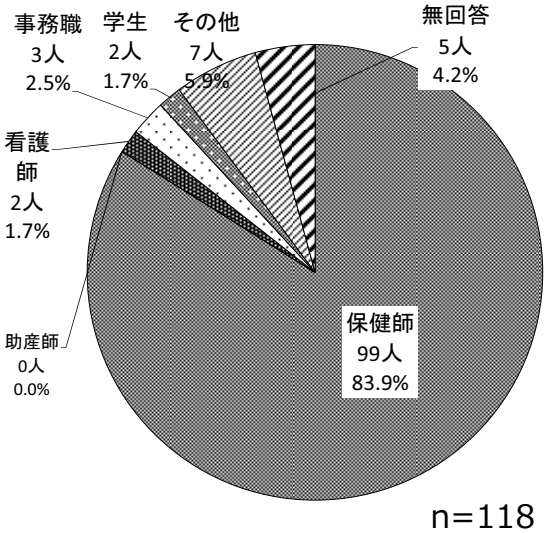
図表1. 在勤・在学地



図表2. 所　属



図表3. 職　種



＜その他＞17件のうち回答９件

・在宅保健師会
・地域包括支援センター
・病院
・国保連合会
・保険組合
・団体役員
・大学院
・大学
・マスコミ

＜その他＞7件のうち回答5件

・役員職
・介護支援専門員
・会社員
・営業職
・編集者

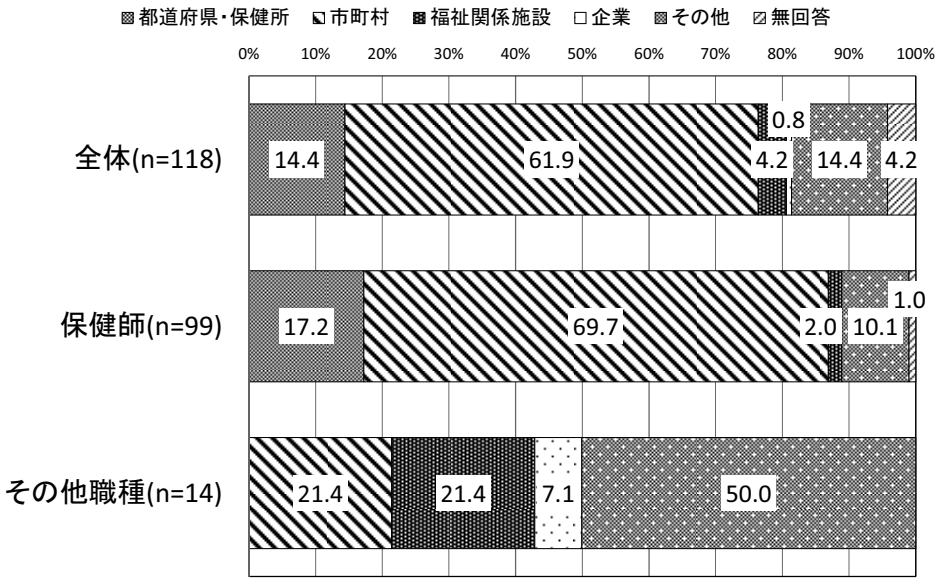
2. 回答者属性－②

●職種別で所属をみると、保健師は「市町村」所属が7割を占める。

●年齢は、「50代」が最も多く、次いで「40代」である。40～50代で6割を占める。

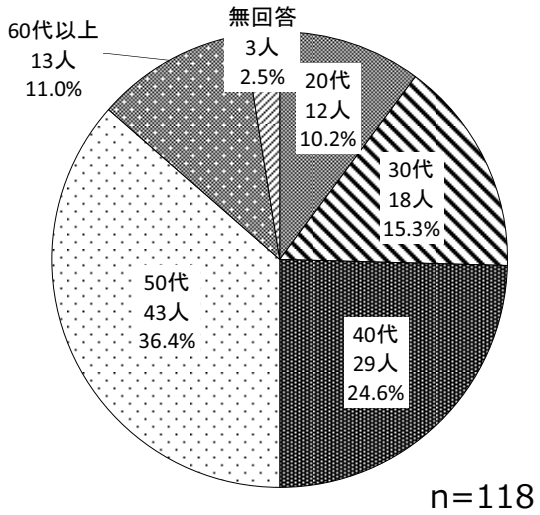
●日本看護協会の会員は、半数を占める。

図表4. 所　属（職種別）

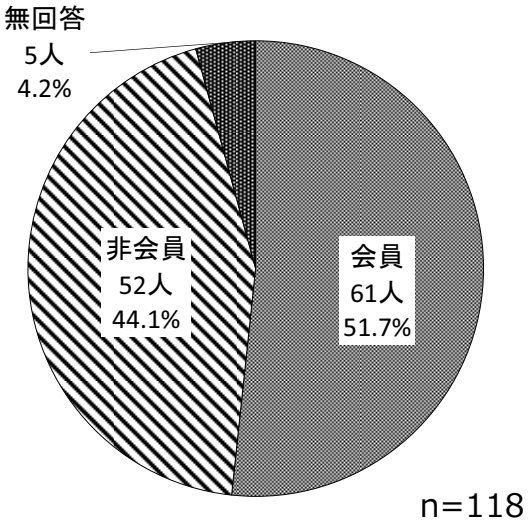


※「その他職種」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の合算。

図表5. 年　齢



図表6. 日本看護協会会員



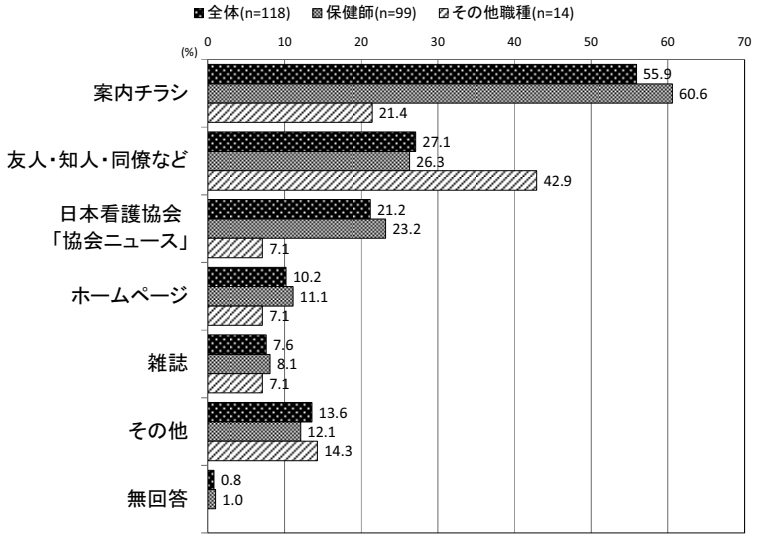
3. 結果

1)「未来へのチカラ2015」認知経路

●認知経路は全体では「案内チラシ」が5割を超え最も多い。

●保健師は、「案内チラシ」が6割と最も多いが、「その他職種」では「友人・知人・同僚など」が最も多い。

図表7. 「未来へのチカラ２０１５」認知経路（全体・職種別）



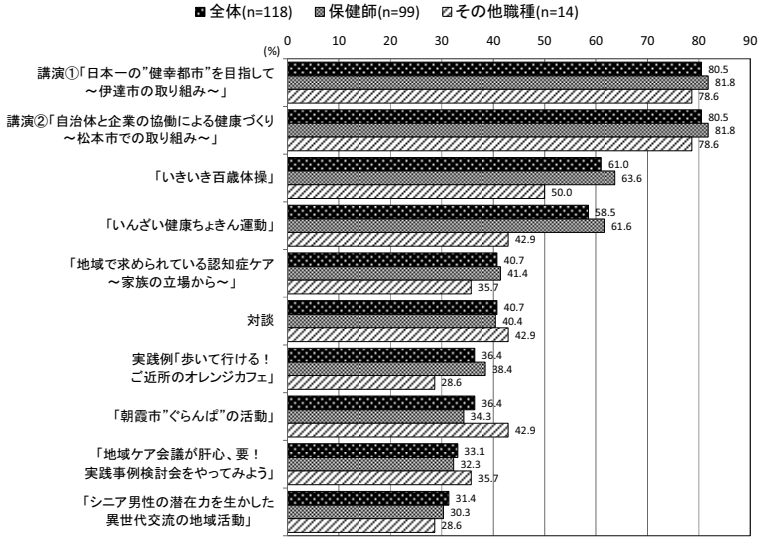
※「その他職種」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の合算。

2) 参加したプログラム

●参加したプログラムは、シンポジウムの講演が8割と最も多い。

●セミナーは「いきいき百歳体操」、「いんざい健康ちょきん運動」が6割前後で他のセミナーよりも多く、「保健師」の参加割合が「その他職種」よりも高い。

図表8. 参加したプログラム（全体・職種別）



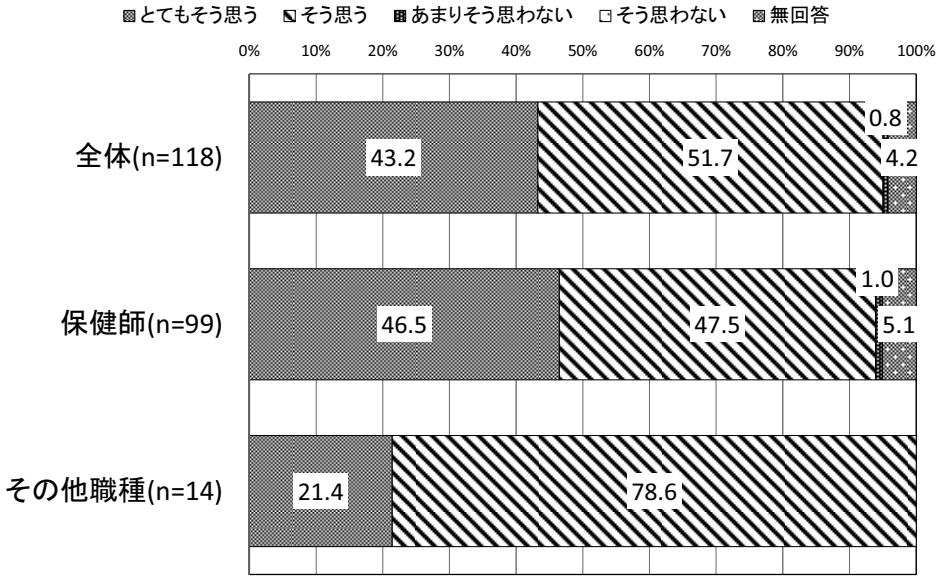
※「その他職種」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の合算。

3）今後の取り組みへの活用

●参加したプログラムを通して、今後の取り組みに活かせると思うかについては、全体では9割以上が肯定的な回答である（とてもそう思う＋そう思う）。また、保健師は「とてもそう思う」が5割近くあり保健師にとって有意義なプログラムであったことがうかがえる。

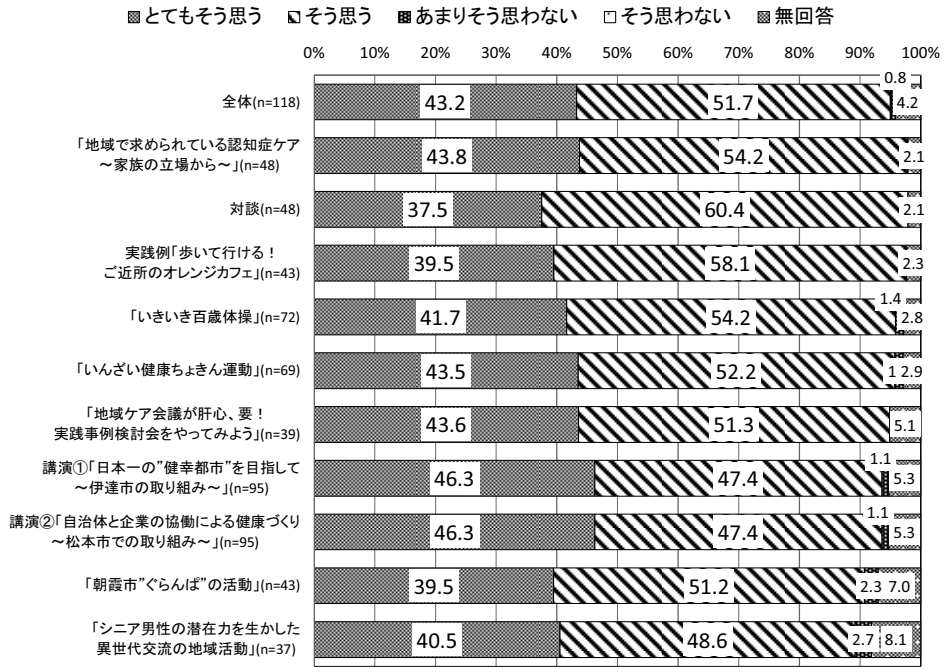
●参加したプログラム別にみても、概ね9割以上の肯定的回答（とてもそう思う＋そう思う）である。

図表9. プログラム内容を通して今後の取り組みに活かせると思うか（職種別）



※「その他職種」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の合算。

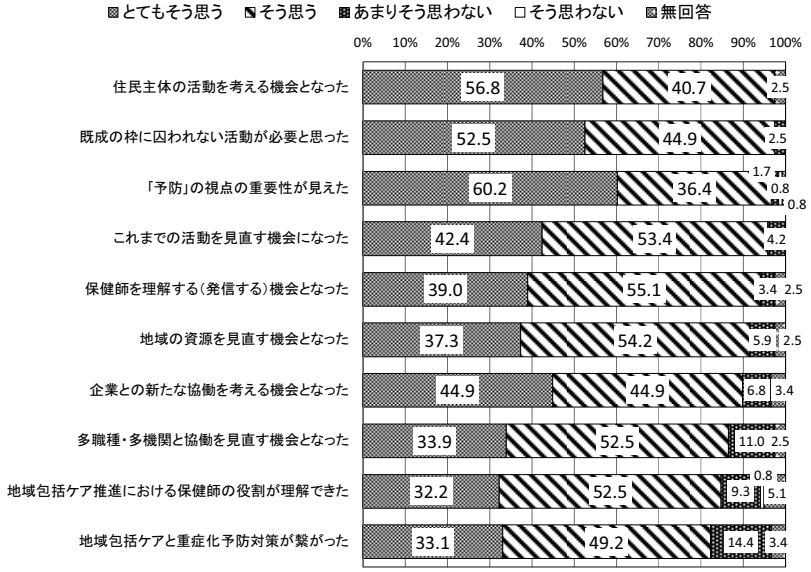
図表10. プログラム内容を通して今後の取り組みに活かせると思うか（参加プログラム別）



4）感じたこと・得られたこと

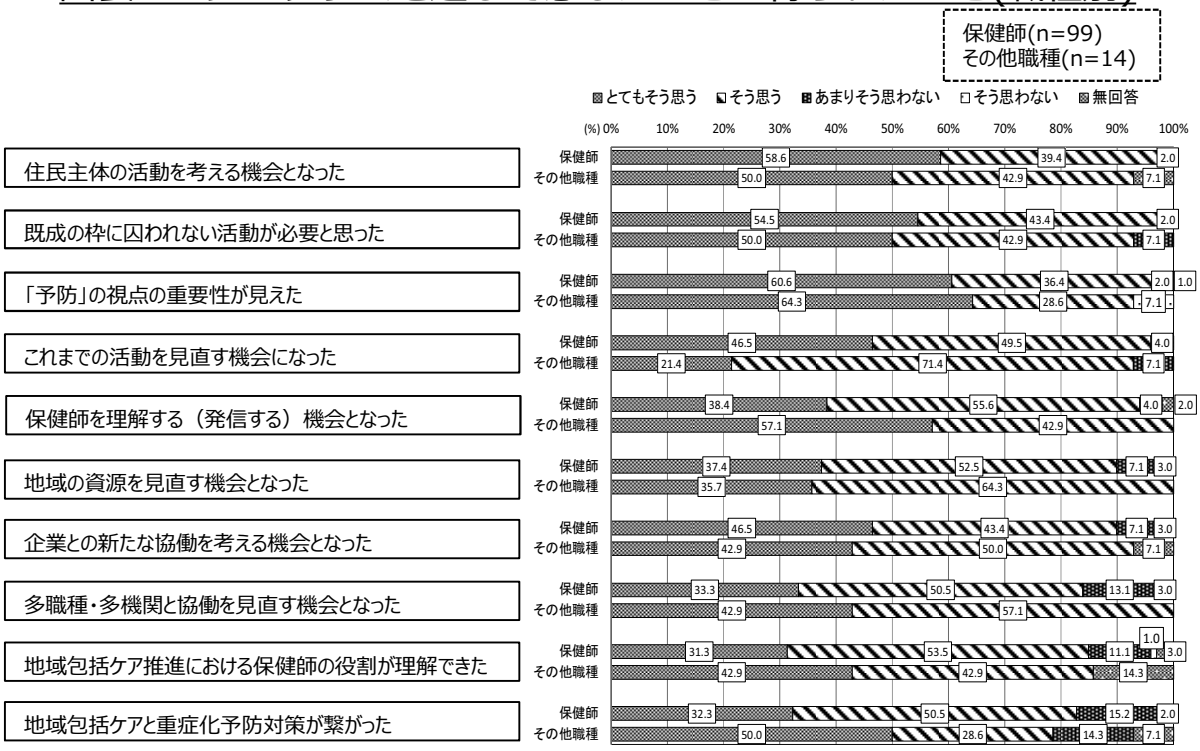
●プログラムを通じて感じたこと・得られたことについては、いずれも8割以上（とてもそう思う＋そう思う）が肯定的に捉えているが、特に「住民主体の活動を考える機会となった」、「既成の枠に囚われない活動が必要と思った」、「「予防」の視点の重要性が見えた」、「これまでの活動を見直す機会となった」は、95%以上が肯定的に捉えている。

図表11. プログラムを通じて感じたこと・得られたこと



●プログラムを通じて感じたこと・得られたことを職種でみると、肯定的な回答割合が高い上位項目は「保健師」の評価が高く、「その他職種」は、「保健師を理解する(発信する)機会となった」、「地域の資源を見直す機会となった」、「多職種・多機関と協働を見直す機会となった」が100%である。

図表12. プログラムを通じて感じたこと・得られたこと(職種別)



※「その他職種」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の合算。

5）保健師の仕事への関心

●保健師以外の方について、保健師の仕事への関心をみると、「非常に関心が高まった」と「どちらかといえば関心が高まった」を合わせると8割を超えている。

図表13. 保健師の仕事への関心（保健師以外の方）

n=19

		人数	%
1	非常に関心が高まった	10人	52.6
2	どちらかといえば関心が高まった	6人	31.5
3	どちらともいえない	1人	5.3
4	どちらかといえば関心を持てなかった	1人	5.3
5	まったく関心を持てなかった	0人	0
6	無回答	1人	5.3
	合計	19人	100

6）感想、看護協会への期待

●感想では、シンポジウム、セミナーの内容が参考になったという声がほとんどであった。また、このようなプログラムや研修を今後も望む声もある。

本日の感想、本会への期待	在勤・在学地	所属	職種	年齢
・各セミナーの発表は、他研修でも聞く機会もあり（すばらしい内容です）とても参考になりますが、それ以上に、現代、多職種が多様に活動の幅を広げる中、保健師のアイデンティティーが失なわれ、まさしく、「保健師」と胸をはって、語れる事がすくなくなっていると感じていました。最後の対談は、今後の保健師のあり方を考えさせられるとてもよい内容でした。	山梨県	市町村	保健師	30代
・みなさん、いきいきと楽しそうに発表してみえるのが印象的でした。私もしたい！！と思う活動でした。今の職場ではなかなか難しいことですが、自分なりにできることからはじめたいと思います。	三重県	市町村	保健師	30代
・住民との対話の積み重ねをなくして保健活動の広がりはないことを改めて考えました。	東京都	市町村	保健師	40代
・井の中の蛙にならない様、先進的な取り組みを知る事が出来、大変勉強になり、今後の活動に行かしていきたいと思います。特に住民の力を引き出し、橋渡しをしていく事がとても大事だなとあらためて思いました。	神奈川県	都道府県・保健所	保健師	50代
・地域包括ケアシステムというと、医療と介護の連携や認知症対策に注目されがちだが、一次予防としての健康づくりの推進や地域ぐるみで取り組む体制づくりなどが重要であると改めて気づかされた。	栃木県	市町村	保健師	50代
・改めて保健師が健康なまちづくり、介護予防、地域の活性化等をしていく役割があるということを、そのノウハウを持っているということを自覚した。	大阪府	その他	保健師	60代以上
・とても素晴らしい内容でした。地域を健康にする大切さを理解していましたが、なかなかうまくいかず、また成果も見えにくかったのですが、いくつかの先進市の取り組みをきかせていただき、また前を向いて頑張ろうと思えました。今後もこのように他市町村の取り組みを教えていただけるとありがたいです。	山梨県	市町村	保健師	30代
・保健師としてやりたいこと、やらなければならないことは山積みで行政の中でどう、それを伝え実現化していくかというところで、理解がうまく伝わらずくじけることばかりです。なので、モチベーションを上げるために自腹を切り広く勉強しに来る機会が本当に貴重な私のエネルギーになっています。これからも今、必要なこと、保健師としてのエネルギーになる企画をお願いします。	山形県	市町村	保健師	40代
・地域（住民）の声を聞き行政、施策にどのように生かしていくかという視点を持ち活動をしていくことの必要性を再確認することができました。他のセミナーにも参加したかったと思いました。地域の資源とつながりネットワークをつくり地域全体を元気にする施策を考えていくことが今後必要。	埼玉県	市町村	保健師	50代
・本日の各自治体の取り組みを伺い、あらためて住民がより健康になることへの支援をしっかりやっていこうと強く感じました。覚悟ができました。	東京都	市町村	保健師	40代
・保健師が2025年以降の地域包括ケアに向けた活動を積極的に展開してほしい。保健師が医療に目を向ける取組みが必要ではないか	東京都	その他	その他	40代
・行政保健師として、住民の健康に責任と覚悟を持たなければならないと改めて感じさせられる会でした。このような研修会が看護協会主催で企画されたこと、嬉しく思います。今後もこの様な研修を宣しくお願いします。	福岡県	都道府県・保健所	保健師	30代

※職種の「その他」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の何れか

本日の感想、本会への期待	在勤・在学地	所属	職種	年齢
・大学院にいると、現場で感じていた熱い想い疑問がにぶってしまうので、とてもいい刺激になった。もっともっと現場と研究・教育とつながれたらいいのにととても感じた。PHNは偉大！！（PHNはライセンスのみしか持っていないが）	東京都	その他	学生	30代
・健康づくりは楽しいと思った。日頃はハードな事例に時間をとられていると思う。地域づくり、健康づくり、住民と一緒にetcなどは、大切で大事で楽しいと思った。つながる、つなげるは保健師の役割と責任とやりがいを感じた。	埼玉県	都道府県・保健所	保健師	40代
・コラボの企画ー今後も必要と思います。←これぞ日看協事業ではないか！！！ ・保健師の質向上についての現代教育、特に事例検討の普及は都道府県看協との連携が重要かつ必要と思いました。	愛知県	その他	保健師	60代以上
・日々の業務に流されて、本来の目的を見失いそうだったが、様々な取り組みが参考になり原点に戻れた。	神奈川県	福祉関係施設	看護師	40代
・全国の情報、熱意を受け取る機会となりありがたく感じた。日頃の業務とは若干異なるテーマであったが、、保健師活動の原点、やはり、保健師の業務ってこういうことなんだな、と再確認（自分の中で）できた。日々の業務に流されず、時々立ち止まって基本に戻りたいと思えた。 ・セミナー、前任地での活動を思い出した。参考点が多かったので職場や管内に伝えたいと思う。	静岡県	都道府県・保健所	保健師	50代
・企業とのコラボに興味があり、参加しました。現在、とても保健師活動に関しては、良い意味でも、悪い意味でも波がきている事を、感じているので、企業力や地域力をどう生かして、これからの保健師活動につなげるか、考える機会になりました。ありがとうございました。	東京都	市町村	保健師	40代
・保健師の力を期待してくれていることに感謝です。ポリシーを持ちつづけて、活動していくことの大切さを再確認しました。	高知県	市町村	保健師	30代
・本来のあるべき保健師像を改めて確認できました。	神奈川県	市町村	保健師	30代
・活動の報告をされる皆さんの生き生きと語る様子に元気をいただけたと思います。楽しくなれるような活動を目指していけたらと思いました。そのような活動づくりができるような生き生きとしてPHNを支えていく、気づいてもらう、ということも必要だと思いました。	埼玉県	都道府県・保健所	保健師	40代
・自分がやっていきたいこと（シニアケアメン育成）の方向が少し見えてきました。 ・地域包括で働いている方々（保健師）の給料がすごく安いので努力も必要ですが、社会でアップしてあげるシステムが必要。	東京都	市町村	看護師	60代以上
・猪飼先生のお話をはじめて聞かせていただきましたが、新鮮な捉え方ができました。先生の講演をまた聞きたいと思いました。	青森県	市町村	保健師	50代
・事業やケースワークにおわれる日々、これではいけないと思いつつ、その事業やワークですらこなせない現状、そこから一歩先のことに取りくむのはなかなかむずかしい。でも、他市の保健師活動を拝聴し、少しやれることはあるのではないかという気持ちを持てた。	埼玉県	市町村	保健師	30代
・とても良い企画でした。まちづくり、PHNの枠をもっともっと拡げていく力量形成が必要。	埼玉県	市町村	保健師	50代
・先駆的な取組みをしている自治体には、優秀な保健師が事業にかかわっている事が多いと感じました。このため、自治体における保健師さんたちへの期待は大きくなってきている。	東京都	市町村	事務職	50代
・全国のすばらしい活動を知ることができ、自分の地域でも生かしていきたいと思います。ぜひ継続的に開催していただきたいと思います。	愛知県	都道府県・保健所	保健師	50代
・地域ケア会議のデモは大変参考になりました。個別ケース対応から政策形成へ保健師の力量形成につなげたいと思います。	群馬県	市町村	保健師	50代
・現在、業務上で具体的な対策を求められている中、従来の枠から出られないでいたところですが、今回力をもらえました。協会については、どうしたら理解してもらえるだろうと、考えます。なかなか加入してもらえません。	福島県	都道府県・保健所	保健師	50代
・始発の電車でこちらの研修へ伺って本当に良かったと思いました。地域の保健師として、今何をしていくのかを考える機会となりました。ありがとうございました。上司と一緒に参加したので、今日学ばせて頂いた事をどう生かすかを共通の認識を持ってできたので、なおよかったです。また企業の本当によく練られた資料やプレゼンテーションのすごさをこの近さで伺う事ができる貴重さに感謝いたします。	三重県	市町村	保健師	40代
・看護協会の会員として30年近く、会費を収め、建設費も負担をしてきた立場でしたが、初めて、東京の研修会に「参加してみよう」と思うテーマでした。（自分にとって、まさにピンポイントの欲しい情報でした）参加できて満足感でいっぱいです、ありがとうございました。	愛知県	市町村	保健師	60代以上
・保健師の話だけではなく、企業や市長の話が直接聞けたのが良かった。保健師対象の研修等が増えると嬉しいです。	福岡県	市町村	保健師	30代

※職種の「その他」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の何れか

本日の感想、本会への期待	在勤・在学地	所属	職種	年齢
・自分に足りないものは…と考えた時、それは覚悟だと思いました。	島根県	都道府県・保健所	保健師	50代
・住民主体の地域の健康づくりをどのように取り組んでいったらよいかがたいへん参考になった。 ・今後もこのような研修会をお願いしたいと思います。	茨城県	市町村	保健師	50代
・他自治体の取り組みを学べたこと。コーディネーターに解説をしていただき、より整理ができました。ローソンとの協働事例も今回初めて具体的に聞くことができました。	愛知県	都道府県・保健所	保健師	50代
・ふだん暮らしている都市部のことばかり情報が入ってきますので、地方の中山間部などの実情、そこでの取り組みを知る機会はとても大切だと思っています。このように、ナマの声が聴けるプログラムをこれからもたくさん実施してください。	千葉県	福祉関係施設	事務職	50代
・ローソンのプレゼンがさすが！！と思いました。企業と行政のコラボは難しいと思いがちですが、企業から学ぶべきことは多いとあらためて思いました。	奈良県	市町村	保健師	50代
・どの報告もすばらしい取り組みで、参考にさせていただきたいと思いました。成功の裏には大変にご苦労があり同じことはすぐにはできないと思いますが、自分の市に応じたものを、何か取り組んでいきたいという元気が出ました。ありがとうございました。	大阪府	市町村	保健師	50代
・中板先生のお話をもっとききたいと思いました。	奈良県	市町村	保健師	40代
・久しぶりの看護協会の研修でした。PHNにも参加できる良い研修でした。仕事の考え方、（方向性）をみなおす、機会になりました。	千葉県	市町村	保健師	50代
・保健師の本来の役割、今後の方向性など再確認させていただきました。無料で開催していただき、ありがとうございました。（非会員のため）	埼玉県	市町村	保健師	50代
・今の行政の保健師は、事務の比率が多くなってしまい、地域に出たくても、出る時間を確保することが困難である。自治体での保健師の役割、活用のし方をもっと首長、事務方上司に「見える化」？で、わかってもらえるよう伝えてもらえるとありがたい。	千葉県	都道府県・保健所	保健師	50代
・保健師になったばかりですが、こうして先輩保健師さんたちの活躍を知ることができ、私も頑張ろうという気持ちになれました。	神奈川県	福祉関係施設	保健師	20代
・保健師の本来の活動をしっかりされている報告を聞けて良かった。今、その動きが減っているように思えていたので。	大阪府	その他	保健師	60代以上
・保健師に特化した研修は少なかったので、応援してもらえたような気がしました。	栃木県	市町村	保健師	30代
・午前中も午後の講義も非常に学びの多い研修でした。ありがとうございました。PHNのできること、PHNだからできることを改めてじっくり考え、広い視野でこれからもがんばりたいです。	山形県	市町村	保健師	40代

※職種の「その他」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の何れか

7）その他気づいた点（抜粋）

その他気づいた点	在勤・在学地	所属	職種	年齢
・会議デモ、体操デモ視覚から入りとても良かったです。（可視化）・保健師への熱いメッセージを頂き勇気づけられました。ありがとうございました。	群馬県	市町村	保健師	50代
・動くPHNが求められます。感性が鈍らないようにしたい。 ・いわゆるベテランのPHNの課題として柔らか頭への取り組みは現職として勤めるうちは重要と思いました。	愛知県	その他	保健師	60代以上
・健常者の維持、拡大が「健康寿命の延伸」の対象ターゲットであり、日常生活の中での保健師の方々の役割がとても重要であることが認識できました。また、保健師の皆様とのコラボレーション活動を考えていきたい。	東京都	その他	その他	60代以上
・ケア会議は色々なやり方があると思います。今日実演していただいたやり方は、成熟していればと思います。フロアとの様々な実践の仕方なども話し合えればもっと私が欲しかったものが得られたかなと思いました。やり方が違っても出る結果は同じだと思いました。今回で最後なのかもしれませんがぐらんぱも認知症も全部みたかった、2日間くらいでできればよかったかな。	山形県	市町村	保健師	40代
・事務的なことに追われ、PHNとしての専門性を見失いつつあることに気づかされました。業務量を言い訳にせず、その中でも、できることを見つけ、自分がしなくてはいけないことをして行きたいと思いました。	島根県	都道府県・保健所	保健師	50代
・実践例をたくさん聴いて見ることができたのは良かったと思いますが、企業とのコラボレーションや、政策立案につなげるあたりのやや抽象的な論について、もっと掘り下げていただけるとうれしいです。冊子やテキストなど、編集された物を読んで学べるチャンスもあるといいなと思います。	千葉県	福祉関係施設	事務職	50代
・グランパの活動、報告者がとてもいきいきされており、その導入に保健師が関与されており、どう地域をみ視点をもって活動することの必要性をかんじた	大阪府	その他	保健師	60代以上
・参加して自分自身が笑顔になっていました。いきいき暮らす、自分らしく元気にいる、自分の経験を地域の中で生かす、ということを求めている住民はたくさんいる。そういう人達と無理なく、全ての人とつながることができるポジションを保健師として自覚するとともに、活動したくなる気持ち（元気力）になりました。	埼玉県	都道府県・保健所	保健師	40代
・市町村の保健師には非常に参考になる内容だったと思います。私としては、市町村支援にいかしていきたいと思います。	–	都道府県・保健所	保健師	50代
・猪飼先生の話が少しわかりにくかった。保健師は看護職の中でも特に、生活している“人”、地域で、複雑な要素から成り立ちあらゆる健康状態の“人”、を見てきたので、今さら、地域包括ケアが高齢者対策という狭義ではないと、当然考えています。	奈良県	市町村	保健師	40代
・地域ケア会議のセミナーに参加させて頂きました。演習（ロールプレイ）スタイルで大変勉強になりました。参加者に背中を向けての会議の様子だったのでどなた（職種）の発言かややわかりませんでした。挙手などして合図を送ってから発言して下さると良かったかなと思いました。よい企画で、その分準備が大変だったことと察しています。	東京都	–	保健師	60代以上
・体力づくり、仲間づくりのセミナーはとても勉強になりました。今後に役立てていこうと思います。	群馬県	市町村	保健師	20代
・特に誘い合わせなくても会場に行けば知っている顔があると思い参加したが、書きながら思い出したが（今日は研修会が重なっていたためか）静岡県勢が少なく（気がつかなかっただけ？）残念だった。（・昼休み、ローソン、探したけれどわかりませんでした。） ・企画ありがとうございました。2回目もお願いします。仲間ひっぱってきます。	静岡県	都道府県・保健所	保健師	50代
・広い視点での、時代の要請について、又、期待しています。	東京都	その他	保健師	60代以上
・本当にきてよかったです。ありがとうございました。今日学んだことをどう生かすか…がんばりたいと思います。	大阪府	市町村	保健師	50代
・保健師の本来業務をしている方々や、それにエールを送ってくださる先生のお話をきいて、うれしかったです	千葉県	都道府県・保健所	保健師	50代
・参加したかいがありました。ありがとうございました。	千葉県	都道府県・保健所	保健師	50代
・健康チェックをやってみたかったのですが時間的に、やる時間がなかったため、残念でした。健康チェックの時間帯に一工夫ほしかったです。	埼玉県	市町村	保健師	40代
・各分会の様子について、報告があればよかったと思います。	神奈川県	市町村	保健師	30代
・勝手なことを言って申し訳ないのですが、本セミナー第2回の開催を楽しみにしたいです。東京で中央の風（最新で内容の濃い）をいただき、明日から、頑張れます。ありがとうございました。	静岡県	その他	保健師	50代
・住民主体の保健活動をつくっていきたい	三重県	市町村	保健師	50代
・伊達市のおはなしではもっと具体的な話がききたかったです。	埼玉県	市町村	保健師	40代
・どのセミナーも関心のあるテーマで、全て参加したかったですが残念です。	福岡県	都道府県・保健所	保健師	30代
・地域ケアのデモで、皆さん後ろ姿だったので、誰がしゃべっているのかわからず、みえた方がよかった	山形県	市町村	保健師	40代

他多数

※職種の「その他」は、「看護師」、「事務職」、「学生」、「その他」の何れか

アンケート表（表面）

「未来へのチカラ　2015」に関するアンケート

※アンケートにご回答いただいた方に、粗品を進呈いたします。

問1．本日の「未来へのチカラ 2015」は、何でお知りになりましたか。（あてはまるものすべてに○）

1.　案内チラシ	4.　日本看護協会「協会ニュース」
2.　雑誌（　　）	5.　友人・知人・同僚など
3.　ホームページ（　　）	6.　その他（　　）

問2．本日のシンポジウムやセミナーの中で、どれに参加されましたか。(あてはまるものすべてに○)

1.　講演①「日本一の"健幸都市"を目指して ～伊達市の取り組み～」	6.　「地域で求められている認知症ケア ～家族の立場から～」
2.　講演②「自治体と企業の協働による健康づくり ～松本市での取り組み～」	7.　実践例「歩いて行ける！ ご近所のオレンジカフェ」
3.　「いきいき百歳体操」	8.　「シニア男性の潜在力を生かした 異世代交流の地域活動」
4.　「いんざい健康ちょきん運動」	9.　「朝霞市"ぐらんば"の活動」
5.　「地域ケア会議が肝心、要！実践事例検討会をやってみよう」	10.　対　談

問3．参加されたシンポジウム、セミナーを通して、今後の取り組みに活かせると思いますか。
（あてはまるもの１つに○）

1.　とてもそう思う	2.　そう思う	3.　あまりそう思わない	4.　そう思わない

問4．本日のイベントを通じて感じたことや得られたことについてお伺いします。それぞれについてお答えください。（それぞれ行ごとに１つに○）

	とても そう思う	そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
1.　既成の枠に囚われない活動が必要と思った	4	3	2	1
2.　これまでの活動を見直す機会になった	4	3	2	1
3.　「予防」の視点の重要性が見えた	4	3	2	1
4.　地域包括ケアと重症化予防対策が繋がった	4	3	2	1
5.　企業との新たな協働を考える機会となった	4	3	2	1
6.　住民主体の活動を考える機会となった	4	3	2	1
7.　地域の資源を見直す機会となった	4	3	2	1
8.　多職種・多機関と協働を見直す機会となった	4	3	2	1
9.　地域包括ケア推進における保健師の役割が理解できた	4	3	2	1
10.　保健師を理解する（発信する）機会となった	4	3	2	1

アンケート表（裏面）

問5．本日の感想や本会への期待等をお聞かせください。

問6．その他、お気づきの点等がございましたら、自由にご記入ください。

＜問７は保健師以外の方にお伺いします。＞

問7．本日のシンポジウムやセミナーをご覧になられて、保健師の仕事への関心が高まりましたか。
（あてはまるもの１つに○）

1.　非常に関心が高まった	4.　どちらかといえば関心を持てなかった
2.　どちらかといえば関心が高まった	5.　まったく関心を持てなかった
3.　どちらともいえない	

【最後に、あなたご自身についてお伺いします。】

※「2.所属」から「5.日本看護協会」の回答欄は、あてはまるもの１つに○をつけてください。

1. 在勤・在学地	（　　）都・道・府・県
2. 所　属	都道府県・保健所　・　市町村　・　福祉関係施設　・　企業 その他（　　）
3. 職　種	保健師　・　助産師　・　看護師 事務職　・　学生　・　その他（　　）
4. 年　齢	10 代　・　20 代　・　30 代　・　40 代　・　50 代　・　60 代以上
5. 日本看護協会	会員　・　非会員

～　ご協力いただきありがとうございました　～

平成 27 年度　全国地域包括ケア推進大会

～国民の健康をまもる保健師 Presents～

コラボが生みだす健康づくり 未来へのチカラ 2015

当日配付資料等一覧

1. 抄録集
2. 看護の将来ビジョン（冊子）
3. 「未来へのチカラ 2015」に関するアンケート

【参考資料】

① 健康手帳（冊子）

② 認知症予防はカラダづくりから！（パンフレット）

③ わたしたちは健康家族!!（リーフレット）

④ 月刊「健康づくり」2015.10 月号（冊子）

⑤ 看護職賠償責任保険制度のご案内（リーフレット）

⑥ ばんそうこう（看護の日グッズ）

※参考資料提供（上記①～④）　公益財団法人 健康・体力づくり事業財団

平成 27 年度　全国地域包括ケア推進大会

～国民の健康をまもる保健師 Presents～

コラボが生みだす健康づくり 未来へのチカラ 2015

後援団体一覧

厚生労働省

全国市長会

公益社団法人　埼玉県看護協会

公益社団法人　千葉県看護協会

公益社団法人　東京都看護協会

公益社団法人　長野県看護協会

公益社団法人　高知県看護協会

健康日本 21 推進全国連絡協議会

全国保健師長会

一般社団法人　全国保健師教育機関協議会

一般社団法人　日本産業保健師会

一般社団法人　日本公衆衛生看護学会

日本保健師活動研究会

日本介護福祉・健康づくり学会

公益財団法人　健康・体力づくり事業財団

（順不同）

協　　力

株式会社　タニタ

公益財団法人　健康・体力づくり事業財団（参考資料提供）

事務局

担当理事	中板　育美	常任理事
担当部署	健康政策部	
	村中　峯子	健康政策部長
	橋本　結花	健康政策専門職
	富田　洋司	健康政策部保健師課
	金丸　由香	健康政策部保健師課
	坂田　祥	健康政策部保健師課
	斉藤　秀美	健康政策部保健師課
	折見　隆広	健康政策部東日本大震災復興支援室

平成 27 年度　全国地域包括ケア推進大会　報告書
～国民の健康をまもる保健師 Presents～
コラボが生みだす健康づくり 未来へのチカラ 2015

発行日　2016 年 3 月 31 日
編集　公益社団法人　日本看護協会　健康政策部保健師課
公益社団法人　日本看護協会
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前 5-8-2
発行　TEL　03-5778-8831（代表）
FAX　03-5778-5601（代表）
URL　http://www.nurse.or.jp/

※本書からの無断転載を禁ずる

公益社団法人 日本看護協会